

---

# 小さな飯屋の繁盛記

大原雪船

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな飯屋の繁盛記

### 【Nコード】

N9381T

### 【作者名】

大原雪船

### 【あらすじ】

ヒノモトという国の首都、ヤマトに一軒の飯屋があった。

美味しい食事を提供する気の良い店主とその子供である看板娘、そして元気な雑用係が3人で切り盛りしている評判の店だった。

とんでもなく変わった料理を出す事があった。困った時に助けられる事もあった。ありえない人物が客として来る事もあった。しかし、彼らが何者であるまで分かる者はほとんどいなかった。

それは短い間に確かに存在した店員達と町人達の触れ合いを描いた物語である。

## 1話…とある日の光景（前書き）

初執筆です。

舞台は戦国時代と江戸時代をミックスさせた様な国の料理屋です。出す料理によっては「時代考証おかしいだろ!!」と思われる事もあるかとおもいますが、笑って許してくださいw

目標は何話になるか分かりませんが、1つの物語として作りきる事です。

駄文の投稿ですが生暖かく見守っていただければ幸いです。

## 1話…とある日の光景

かつて、東と西に分かれての大規模な戦争が長年続いていた。多くの英雄が現れては消え、双方の王も数代において渡り合った。やがて、戦乱は終結。勝利した側による統治が始まった。これはそんな国の中での物語である。

ヒノモトという国の首都、ヤマトにある1軒の飯屋「良庵」は客層が木工などの労働者がほとんどにも関わらず美味しい食事を良心的な値段で提供する事が評判で小さいながらも盛況な店であった。

「魚の塩焼き定食あがったよ。」

厨房を切り盛りするのは店主のマサハル。

細目で地味な顔立ちだが動きは洗練されており、まるで3人はいるかのような早さで次々に飛び交う注文を巧みに調理していく。

「はい。父様、次は風呂吹き大根に豆腐の味噌汁とご飯だよ。」

配膳を行うのは看板娘のミコト。

小さな身体で動き回り、周りに不快感を与えない愛らしい顔立ちで後ろに束ねた髪の毛がピョコピョコと可愛らしく動く様は注文を待つ客の心を和ませる。

「らっしやいだぞ。今満席だから暫し待って欲しいんだぞ。」

絶え間なく店に入ってくる客を捌くのは雑用係のガウ。

一際大柄で筋肉質、少年特有のあどけなさを残しつつも野性味あふれる風貌が押し出しとなる凄みを生み出し、本人は愛想よい積もりでも客の文句が出づらくなる。

評判が高くなれば、客が集まる。客が集まれば集まるほど当然の事ながら大小のトラブルも発生する。それが話に出てくるような突発的なものであると人為的であろうと。

これは、そんな日常の1コマ。

「何だ、こりゃ〜!？」

20人入れれば満席状態になる店内に男の驚いたような声が響き渡る。

周囲の客も何事かと男に注目する。

「おう、店主。この店では客に虫を食べさせるのか。」

どこから取り出したのかゴキブリを掴み上げて叫ぶ男。

表情はニヤニヤと笑っており声も凄んでいるようで演技くさい。

どongoの三文小説でも流行らない状況なら、平謝りする店主に難癖を付けるチンピラ、

運が良ければ颯爽とチンピラを退治する若侍が参上する。

しかし、マサハルの対応は普通の斜め上を行っていた。

「虫を調理する事もありますね〜。イナゴなどは佃煮にするとい

興味を出しますよ。」

男の表情は凍りつく。

これまでイチヤモンを付けた経験は数多いが、こんな返し方をされるのは初めてだからだ。

対してマサハルは慣れているのか全く動じず、ニコニコと微笑んでいるようにも見える。

笑っているのか細目からくる平常時の顔なのか全く判別が出来ない。

「そ、そんな事を言ってるんじゃないやねえ！！この店はこんなゴキブリを客に食わせるのかと聞いて　　るんだ！！」

「いや、あいにくゴキブリは調理法を知らないので店で出していないですよ。」

あまりにも噛み合わない男とマサハルの会話。

激昂する男とノリノリとかわすマサハル。

そんな騒ぎで客の視線は自然と二人に集中した。

平然といなすマサハルを見て常連客はニヤニヤと指を折って向かいや隣の連中と話し出す。

「俺、旦那の当身に1本」

「なら俺は投げに2本だ」

「ハイハイ。ただ今、当身が10本、投げが8本、蹴りが5本だよ。」

次々と客達が賭け出す。それを律儀に記録するミコト。

客が集まると性質の悪い輩に因縁を吹っかけられることも増えて

くる。  
難癖をつけられる　ガウが力づくで撃退のパターンがあまりにも多く、  
相手が複数人いた場合はガウが何秒で叩きのめすか（計測役はミコトが行っている）、  
相手が一人の場合は決まり手が何かで酒を賭ける事が店の恒例行事となっていた。

安い酒代だから負けても懐もさほど痛まない、  
それに加えて喧嘩というイベントを間近で観戦できる、  
ちよつとした刺激が酒の肴になりえるのは、それだけ平和という事だとマサハルも  
溜息を付きながらも賭けを了承していた。

余談ではあるが一度金銭での賭けがあったが、  
マサハルの「ミコトの教育に悪い」という一言で、以後、客が金銭を賭ける事はなかった。  
その場にいた客全員が普段は感じないマサハルの視線の鋭さに凍り付いてしまったからである。  
ちなみに常連客は大抵、マサハルを「大将」、ミコトを「嬢ちゃん」、ガウを「旦那」と呼んでいた。

その日の決まり手は、マサハルに殴りかかろうとした男の襟首をいつの間にか近づいていたガウが掴んでそのまま外に投げ飛ばすというものだった。

ミコトの

「またのお越しを」

という言葉聞いてその場にいた客は思った。



（ ）いくらなんでも来れねえだろ（ ）

## 1話…とある日の光景（後書き）

” 剣客商売 ” を読んで、料理の光景をみていると食べてみたいと思っ  
てしまいます。

” トリコ ” を読んで、こんな食材があれば良いかと妄想してしま  
います。

” 酒のほそ道 ” を読んで、その光景に「あるよなあ」と共感して  
しまいます。

色々な物に影響されやすい料理も小説も素人な作者ですが今後とも  
よろしくお願いいたします。

## 2話：名物料理（前書き）

早速、難産でしたw

無駄に膨らむ上に、終盤はパワーダウン。

若さがほしいです・・・

## 2話：名物料理

飯屋「良庵」の名物料理として「丼物」がある。

ヒノモトではおかずと飯は別々で配膳され、おかずを飯の上に乗せて食べるという習慣は

あまりなかった。

とりわけ飯屋や料亭では行儀が悪いとされ、そのような料理を出す店は皆無だった。

第1号として掻き揚げ丼が品書きで出された当初は奇怪な物として敬遠されていたが、

実際に食べた客に大受けし、その評判が口コミで広がる頃には「良庵」の名物料理となっていた。

特に労働者層の若者を中心に「値段が安い・注文してから出るのが速い・とにかく旨い」と

熱狂的人気を獲得していた。

さらに天井や親子丼などバリエーションが増えるにつれ、

初めは「揚げ物1つまともに拵えられない料理人の小細工」と白眼視していた他の店も

追随し始め、

ヒノモト一の料理人と評される駒鳥屋ヨネが、

「素朴にして洗練、大胆にして繊細、単純にして奥深し」と太鼓判を押ししたこと、拍車がかかり、

今やヒノモトではヤマトを中心とした空前の丼物ブームが巻き起こっていた。

箸を突き立てると熱い飯に程よく熱された卵がからむ。

摘み上げる黄身と白身の配分で味が変わり  
ほんの少しの醤油の塩気が卵と飯の旨みを増幅させる。

味を膨らませるのは醤油でなくてもいい。  
塩でもいい。酢でもいい

何か他の具材を加えても面白そうだ。

調理法は恐ろしく簡単。

焼いて飯の上に乗せるだけ。

されど火加減により食感が千変万化する。

まさに単純にして奥深し。

「凄いよ父様！！おいしいよ〜!?!」

ミコトは試作品として出された丼の味に驚愕しながらも勢い良  
かき込んでいく。

マサハルの教育の成果が綺麗な箸使いでありながらも、その回転は  
留まる所を知らず、

みるみるうちに中身がなくなっていく。

「お代わりは沢山あるから慌てずによく噛んで食べなさい。喉が詰  
まりますよ。」

ミコトの食べっぷりに女の子らしくないかもと苦笑しながらも、  
マサハルはポンポンと頭を撫でると卓を挟んで対面に座る男に目を  
向けた。

今は準備中であるので客卓にマサハル達が座っても不思議ではな  
かった。

「で、何の話でしたっけ？」

「だ・か・ら！！調理法を全て教えるって言ってるんだ!!!」

「娘が食事をしているのです。怒鳴らないでいただきたいですね。」

井物の産みの親としてマサハルに調理法の伝授を請う者が多く来店していた。

マサハルも調理法を惜しみなく伝えたが、そういう者達に教えるための条件が存在した。

- ・教える井は1つだけ。
- ・きちんと作れるようになってから店で出す事。

彼らにとって、料理人としては2つ目の条件は当然と受け止めていた。

勿論、守らないものもいたが大抵は味の面で淘汰されていった。

しかし一旗あげよう、儲けようと良い意味でも悪い意味でも貪欲な者達にとって、

1つ目の条件はマサハルの了見の狭さの表れだと誹謗する事が多かった。

力づくで引き出させようとする者もいたが、須らくガウにより返り討ちにあった。

その日マサハルに教えを請いに来た男もそんな1人である。

「ですから、条件は先程述べた通りです。それを貴方が承諾した上で教えたのですから

問題ないでしょ?」

「エドからわざわざ来て、あんな簡単な教えで納得がいくかってんだ。

大体お前、他にも多く持つてるんだろ?もう少し教えてくれたっていいだろうや。」

「何を言うのかと思えば・・・約束は守りましょうよ。

こちらは嘘偽りなく旨い井物を教えたのですよ?

それに貴方だけ特別扱いは出来ませんしする気もないです。」

「ちつ。もういい！！手前えには頼まねえよ。  
生みの親ってだけでいい気になりやがって……」

立ち上がり椅子を蹴り倒すと男は憤慨を隠そうともせず店を出て行った。

「……怒ってたね。」

「誰にも教えてない物を教えろと言われたから教えて差し上げたの  
にね。」

欲が深かったんでしよう。」

「この丼、美味しいよ??」

ミコトの食べていた丼、それこそが今回マサハルが男に教えた物  
であった。

しかし、男には不評だった。

こういう事が結構多い。

なぜ、怒って帰る人が多いのか？父は代金も取らずに教えているの  
に、文句を言うのか？

ミコトにはそれが理解できなかった。

「父様、なぜ皆怒って帰っちゃうの?」

「……うん。私が全部を伝えてないからだね。」

悪いのは自分だと自覚しているような物言いがミコトには意外だ  
った。

だったらなぜ直さないのか？悪いと思っっているなら直す努力をするべきだと

いつも言ってるではないか。

ミコトの思考を表情から読み取ったのが、マサハルはミコトの小さな身体を持ち上げ

自分の膝の上に座らせた。

「何も意地悪でそういう事をしている訳じゃないんですよ？」

真意を悟ってお礼を言ってくれた人も居ますしね。」

あんな事があつたばかりなのに穏やかだった。

表情も口調も、ミコトの大好きなマサハルのそれだった。

「私の考えです。母様の考えとは違っているかも知れませんが、人に何かを伝える時には何を、どのように、どのくらいの量を伝えるのか。

これが大事だと思います。怒っている人達にとっては、この量が足りないと思ってるんですよ。」

ミコトに物事を教える時、マサハルは必ずといつていいほど料理を例に絡めていた。

それがミコトにとつても非常に分かりやすく、それは後々の血肉となっていく事になる。

「さっきの場合と一緒に考えましょうか。」何を”とは何について言ってるのでしょうか？」

「これの作り方でしょ？」

ミコトは丼を突き付ける事で正解を述べた。



「じゃあ、”どのように”は？」  
「えっとね・・・実際に作ってる所を見せてたね。それに順番もい  
つてたよ!..!」

打てば響く。

このやりとりの瞬間がマサルにとって至福の時であった。  
分かりやすい例えとはいえ、ミコトの聡明さに微笑まじさと誇らし  
さを覚えるのである。

「最後に”どのくらい”は？」

「えっと・・・そこに怒ってたんだよね。」

ウンウンと悩む姿もまたかわいい。

まさしく、マサルは親馬鹿であった。

「父様がいつも言ってる事は何だったかな？」

「え？」基本は大事。けど基本がいつも通用するとは限らない”だ  
よね?」

父の助言がミコトの思考をかき乱す。

しかし、こういう時のマサルが無駄な事を言わない事は幼いなが  
らも理解していた。

”考えても分からない事は聞いてみる。ただし何が分からないかを  
理解してから聞く事”

それもまた、マサルが大事な事だとミコトに教えた事だった。

ミコトはそれにならない、現時点で自分が分かっている事を絡めて回  
答にたどり着こうとする。

「この場合の基本って、丼の作り方だよね？」

焼いて、ご飯の上にのせる。味付けはそのままでもいいし、醤油でも塩でもいい。」

「そうそう。ちなみに、彼はエドから来たって言うてましたね？」

エドはヒノモトにおける東の大都市で首都ヤマトまで徒歩で2週間以上かかる距離にある。

「遠いね〜。あ、だったら卵や醤油が此処と同じお店で買えないって事ね。」

そうになると、この丼の作り方を1から10は教えることができても、

全部あの人が出来るとは限らないって事？」

マサハルは我が意を得たりといった表情で微笑み、グリグリとミコトの頭をなでる。

「正解。結局は自分の店で、あの人が試行錯誤しないと意味がない。1つしか教えないのは、そこに気づかない限り何種類教えても同じ事だから。」

さらに言えば、丼は出来たばかりの料理様式。何の具材をどう調理しても自由が利く。

固定観念で縛りたくなかったってのもありますね。」

人は思うだろう。

たかが料理1つ教えるのにこんな大仰な事は考える必要があるのだろうか？

ミコトの幼さではそこは理解できずにいたが、決して父が悪いわけではないという事だけは感じていた。

(よくわからないけど、やはり父様はすごい。)

それが、ミコトの答えだった。

「基本は分かったけど、この場合の応用ってどうなるの?」

「応用ですか?ふむ・・・これなんかも答えかもしれませんね。」

数分後、新しく出された丼にミコトは舌鼓を打つことになる。

後に、「良庵」の品書きに入り然程人気が出なかったものの、その簡単さから家庭料理として普及されることとなる名物が誕生した。

その名も、「目玉焼き丼」と「玉子焼き丼(後に天津丼と改名)」である。

## 2話・名物料理（後書き）

この世界では玉子は安いという設定。

玉子は昭和の中頃までは高級品ですが、今や庶民の味方ですね。

目玉焼き丼、よく作って食べます。

もちろん黄身は半熟で・・・

### 3話：依頼（前編）（前書き）

やっと更新できました（汗）

遅れた理由はリアルな忙しさと禁煙によるイライラです。

拙作を読んでいただいている皆様申し訳ございませんでした（涙）

### 3話：依頼（前編）

「良庵」は飯屋である。

にもかかわらず、マサハルを頼って客のみならず様々な人が相談にやってくる。

家の屋根に穴が開いたと女性に言われれば、暇をしている大工を紹介し、

借りた金を返せなくて困っていると男性に言われれば、

日雇いの仕事を紹介しつつ返済の期日を延ばしてもらおうように頼みに行き、

辻斬りの噂があつて怖くて夜中に出歩けないと老人に言われれば、ガウを中心に自警団を組み排除に向かわせ、

飼っている猫が迷子になったと子供に泣かれては、常連客を総動員し捜索を行う。

まるで、「何でも屋」「万屋」の様相をていしているが、相談料、依頼料の類は一切取らなかつた。

商いの妨げになっているのだから金を取ればいいのにといい提言にも

「お客から受けた相談をなるべく金をかけずに解決しているだけです。」

それに、皆さん面白がって力を貸してくれますしね。」

マサルからすれば持ちつ持たれつの関係を構築しているだけだからなのであった。

そんな彼の人柄を信頼し、人々は助けを求めた。

その日も一風変わった、それでいてマサルにとっては久々の本職としての

相談事が持ちかけられた。

「料理の助言がほしい、ですか。」

「ワタシ、今度ある人に料理を作るヨ。ケド、何を作ったらいいのかわからないネ。」

あまりに抽象的な相談事にマサルは腕を組み考え込んでしまう。ヤンと名乗ったその男は、駒鳥屋ヨネからの紹介状を持って店にやってきた。

この国では見ない服装、覚えてたと瞬時に分かる不完全な言語、そして明らかにヒノモトに来たばかりの外国人。

見るまでもなく面倒事だと嘆息しつつも確認した紹介状には、このように書かれていた。

「彼の料理はこのままだと人前に出せない。」

どこが駄目なのかは分かるが自分には説明ができないので協力し

「やってほしい。」

・駒鳥屋ヨネ・

ヒノモト一の料理人と言われ、ヒノモト上層部とも繋がり深い女商人。

そして、マサハルにとって料理の師匠だった。

マサハルは改めてヤンの姿を確認する。

がっしりとした体格に腕には火傷の痕があり、マメやタコだらけの汚い手、  
背には年季の入ってそうな中華鍋とお玉。

さぞかし腕の良い料理人なんだろうと理解は出来るが、  
それゆえに師匠がなぜ自分に案件を丸投げしたのかが分からなかった。

よほど、ショックだったのだろう。  
ヤンの顔色はあまり良くなかった。

「ヨネサンはワタシの料理を食べないで駄目だと言ったヨ。  
ワタシこれでも祖国じゃ王様に料理を作ったネ。  
ワタシの誇りズタズタダヨ。」

(師匠、傷つけといて丸投げはないでしょう・・・)

師匠の対応に呆れるものの、異国の料理を勉強できる機会はマサハルには魅力的だった。

とりあえずは原因を究明しないと始まらないと気を持ち直し、  
ヤンと店内で話を聞いていたミコトとガウに指示を出す。

「とりあえずヤンさん、どんな料理を出すか見せて貰えませんか？」



材料は好きに使って構いません。小さな場末の店ですから無い材料が多いでしょう。

ガウは出来る限り店を回って買出しに行つてあげてください。大陸にしかない物でも似たような食材をガウなら見つけれられるでしょう。

ミコトは厨房の使い方をヤンさんに教えてあげてください。私は試食してもらつう人達を連れてきますので。」

「はい」

「分かつたぞ」

「了解ネ」

返答に満足し、マサハルは外に出て行つた。

1刻半（約3時間）後、審査員として常連客を引き連れたマサハルの眼前に、様々な点心やスープ、肉料理が卓に所狭しと並べられていた。

初めて使う厨房で、しかも短い時間にこれだけの料理を！！

「器具の使い方に苦労したけど、ワタシに掛ければこんなモンネ。」

疲れた様子を見せずに配膳するヤンを見て

マサハルは彼が凄腕の料理人である事を再認識した。

「凄いよ父様。動きが父様より速かつたよ！！」

「大陸の料理を久し振りに食べたけど、すっげえ旨いぞ！！」

ヤンの仕事振りを間近でみて興奮したからか、

ミコトとガウの口調も熱っぽい。

そしてマサハルよりタダで食事が出来ると聞いて集まった常連客達は初めてみる料理に今にも飛び掛らんと目がキラ付いていた。

「どれも美味しそうですね。早速いただきますでしょうか？」

この言葉を合図に狂乱の宴が始まった。

「もらい!!！」

「テメエ独り占めするんじゃないやねえよ!!！」

「旦那、それはあつしが目を付けてた饅頭ですぜ!？」

「先手必勝。早い者勝ちだぞ」

米の1粒1粒がハラリとほぐれた炒飯

フカフカの皮と中の餡が絶妙なハーモニーを生み出している包子

香ばしく揚がった衣に歯を突き立てると肉汁がピュッと飛び出す唐揚げ

どれもこれも名前は知らないが、彼らにとっては初めて味わう逸品ばかりだ。

ガウは大きく口を開けて料理を次々と飲み込み、

ミコトは行儀が悪いながらも「うまいよ」と叫びながらハグハグと料理を頬張る。

そんなミコトの世話をしながら、マサハルは料理の味を確かめながらヤンからコツを聞き出そうとする。

ヤンも皆の食べっぷりに気が良くなったのか饒舌になり、

料理の起源も交えて料理談義を繰り広げる。

料理はあっという間になくなり、常連客達も腹を摩りながら満足そ

うな表情で引き上げていった。

後には、ご飯粒1つ残らないような綺麗になった皿と、満腹になったのか腹をポンポンと叩くミコト、まだ足りないのか丼をリクエストするガウト

料理談義を続けながら丼料理を共同で作るマサハルとヤンが残った。

「イヤ、皆さん食べっぷりが半端じゃなカタヨ。

というか、あれだけ食べてまだ食うガウトさんは只者じゃないネ。」

「この辺りは職人が多いですからね。皆身体を使う仕事ですから食べる量がすごいんですよ。」

あ、ミコト！！食べてすぐ横になると牛になりますよ！！！」

調理と片づけを並行しながら、この後どうするかをマサハルは思案する。

ヨネが取った対応、その理由は分かった。

何が言いたいのかも、彼が行う仕事やらも理解できた。

問題は自分より力量のある相手に対してどう説得するかの1点に絞られた。

「ヤンさん、落ち着いて聞いてください。」

「ん？どうした力？」

ヤン自身は料理を作る事に誇りを持っている尊敬すべき相手だ。そして人間としても気持ちの良い男であった。

「今のままだと、あなたの仕事は確実に失敗します。」

マサハルの選択はそれゆえに心を鬼とする事だった。

### 3話：依頼（前編）（後書き）

初めての前後編です。

長々と作ってしまうと、どこで区切ればいいのか迷ってしまいます。前話も勢いだけで書いてしまったせいで、ちょっと不満が残ります。後々、手直ししていきます。

禁煙・・・まさか手に痙攣が起るとは！！

#### 4話：依頼（後編）（前書き）

自分的には多くの方に立ち寄って頂いて、  
感謝の言葉も出ません。

もっと多くの方に楽しんでいただけるように精進する次第です。

#### 4話：依頼（後編）

「あなたの仕事は確実に失敗しますよ。」

料理をつくる者としてヤンはマサハルの遙か先を歩んでいた。マサハルの選択はそれゆえに心を鬼とする事だった。

「・・・理由を教えてほしいネ。」

自分にはどうしても分からなかった事が、たかが小さな飯屋の店主には分かるというのか？  
しかも確実と言われた！？

ヤンの心の中に動揺が走る。

（\*ここより「」内の台詞はヒノモト語、『』内の台詞は大陸語でお送りします）

『簡単な事。あなたに驕りが感じるからですよ』

「!?!」

屈辱であった。

明らかに自分より格が下の料理人に、さも当然のような駄目だし。しかも、自分の国の言葉で突きつけられたのである。  
ヨネに指摘された時よりもヤンのプライドは傷ついていた。

『あんだ、大陸に来た事があるのか？』  
『数年前にね。ガウともそこで出会いました。』

それは関係ないだろうという言葉が喉まで出かかるが、すんでの所で飲み込む。

食事中の会話でマサルが誠意のある人間である事は理解できた。その彼が悪意をもって自分を貶めるはずがない事は分かっていた。しかし、人間は自分の都合の悪い事は聞きたくないものである。自然にヤンの心もささくれ立ってしまう。

『勘違いしないでほしいんですが、料理の腕前は私が逆立ちしても届かないです。』

『そこは素晴らしいんです。』  
『だったらどこが悪いのだ？』

そこからマサルは自分の感じた事をあらん限りに並べ立てた。その指摘がヤンの心中に容赦なく突き刺さった。

『あんな短い時間であれだけの料理が出来るなんて私には到底まねなんか出来ません。』

『ただ、そのせいで一つ一つの料理が僅かずつ粗かった。』

『火力が足りないのを補ったため炒飯は少し油が多く、蒸し物は蒸し過ぎと感じました。』

『ミコトを補助に付けてくれと言ったのに、簡単なことさえ全くさせなかったそうですね。』

『食材の仕入れもご自分で行ったとの事ですが、その間に汁物の出汁が強く出た。』

味がクドくなったのではないですか？』

『今日食べてくれた人達は喜んでましたがね。分かる人には違和感が出るでしょうね。』



『初めて食べる異国の料理です。そういう味なのかと納得させることはできませんよ?』

『けどね、私やガウ、ミコトならこう付けることも出来るんですよ。”大陸で食べた時の方が美味しかった”と。』

まさに言いたい放題、「ずっと俺のターン」状態であった。

言葉は分かるが、それがどういう意味なのかが分からないガウがミコトに解説を求めると、

「父様がここまで言うのって初めてだよ」と、驚いた顔を浮かべる。

言われ放しのヤンも何とか返答をしようとするものの、それもマサハルの舌鋒の餌食となる。

まさに、1言えば10になって返ってくるという言葉がふさわしい状況であった。

『し、しかし、それは道具が・・・』

『小さな飯屋の調理場するには環境が悪かったというのもあるでしょう。』

そして、一人でそれを全部こなしてしまった。』

『そのどこがいけないというのだ!?!』

『自分の限界以上の、そして最善を尽くしたと決していえない結果となった。』

あなたが任されている仕事で出す料理を出して欲しいとお願いしたにもかかわらずです。』

『ぐっ・・・』

『あなたはこの調理場で出来る料理の中で最善を尽くすべきだった。』

マサハルも心苦しかった。尊敬すべき料理人にここまで言いたくな

かった。

しかし、追求の手を緩める訳にはいかなかった。

今分かってもらえないと、ヨネの押した烙印をそのままにしておく  
と、

ヒノモトで料理を振舞う事に制限がつく。

そして、振舞う相手が大问题であった。

『あなた、それを面と向かって女王にいうつもりですか？』

”道具のせいで不味い、不完全な料理もありますが食べる”と。』

『ど、どうしてそれを！？』

『勘ですよ。けど、その顔をみると当たりのようですね。』

ついでに言うと、女性に油を使った料理を多く出すのはお勧めし  
ませんよ？』

かつて東西に分かれた勢力は長い間、膠着状態を保ちながら小競り  
合いを続けていた。

そして、4人の英雄を配下に収めた女王が争いに終止符を打ち、  
ヒノモトと国家の名を変え統一されることとなった。

女王の名はツバキ、世界的には極東の小さな島国の統治者ながら

「大君<sup>タイクワン</sup>」と呼ばれ注目される人物である。

統一後は周辺の列強国と対等の条件の通商・友好条約を結び、  
盛んに交流を深めるなど傑出した政治能力を内外で発揮している。

勘といったもののマサハルの指摘は決して根拠が無いわけではなか  
った。

・ヤンは祖国の王にも料理を振舞った事がある。

・異国の料理人が結果はどうであれ、国内の実力者かつヒノモトで一番の料理人に会って腕前を見せた。

・ヤン自身の料理の腕が素晴らしい事。

そして・・・最大の理由があるにはあつた。

その理由にマサルは非常に面倒だと感じ、心で涙を流す。

(師匠、一介の料理人を外交事に巻き込まないでください・・・)

その理由ゆえにヤンが公式の使節団の人間だと分かってしまったのである。

それに加えて、今まで使節団が料理を振舞つたという話は噂に上つたことがない。

今回が初めてなのだろう。

初めて振舞う相手に女王の名があつても不思議ではないのである。

ふと、ヤンを見る。

マサルの指摘を受けて、膝から崩れ落ち自分が取り返しの付かない事を

起こしかけたと気づいたのであろう。

この世の終わりを迎えたかのように絶望の表情を浮かべている。

『わ、私はどうしたら良いのだ・・・』

『一度自分の腕と周囲の環境を考えて、何が出来て何が出来ないのかを

洗い出してはどうでしょう?』

『そ、それから!?!』

『違う料理の作り手とはいえ、基本はほとんど変わらないでしょう。周りの人に協力を求めてはどうです?』

異国の料理に興味がある者もいるでしょうし、きっと手伝ってくれますよ。』

その後も次々と対応策を挙げられ、ヤンの表情に血色が戻っていく。安堵したのか目尻には涙が浮かび上がっている。

『助かった。今回の事で、私も初心を取り戻す事が出来たようだ。』  
『負った子に教えられて浅瀬を渡ると言います。今回は私が指摘できたまでの事です。』

ヤンが心底理解できた事を感じたのか、我が事のように喜ぶマサハル。

安堵の表情とともに笑顔が浮かぶ。

そして、ヤンの心残りも氷解しようとしていた。

『しかし・・・ヨネさんにはどう謝れば良いだろう。』

『別に師匠も貴方の事に失望したわけではありません。』

食わずに拒絶したのは、嫌いになって言いたくなかったからではありません。

細かい解釈をヒノモトの言葉で語っても貴方が理解できないだろうと感じた、

しかし自分は大陸の言葉があまり話せない。

だから何も言わずに、両方分かる私の元へ行けと言ったのでしよう。』

『そ、そうだったのか。』

『誠意あるのみですよ。師匠はそれが分からない人ではありません。』

この日、マサハルとヤンはお互いの作った料理を肴に夜遅くまで語

り合った。

翌日のヤンの表情は憑き物が落ちたようにすっきりしたものであったという。

後日、ヤンの謝罪を受けたヨネの助力を得て、

大陸料理が城にて女王ツバキを含むヒノモト首脳陣に振舞われた。

前日までの食事の内容を精査し、可能な限り自分の能力を發揮しやすいた調理の環境を整え

当日のツバキの体調に合った料理を城内の料理人とともに作り上げたヤンの姿勢に、

ツバキは感銘を受け、

「汝にヒノモトの人間が学ぶべき事が料理以外にも非常に多い。」

と、お褒めの言葉を賜る事となった。

#### 4話：依頼（後編）（後書き）

当初予定としていた展開と違った方向に……。

マサルに理屈っぽいウザさを感じる……  
理性的な青年をイメージしているのですが。

キャラを設定するのって難しいですね

## 5話：挑戦（前書き）

今回はコメディイリーとかなんというか中途半端な立ち位置ですが、比較的安産でした。個人的にはこういう小話っぽいのは好きです。

## 5話：挑戦

その日、「良庵」は休業日だった。にも、かかわらず卓には様々な料理が並べられていた。

蒸し物、和え物、揚げ物、焼き物、丼、炒め物、漬物、煮物  
宴会でも始まるのかといわんばかりに様々な種類、  
100にも届けと言わんばかりの料理が  
マサルとヤンの手によって作り出された。

ヤンは汗だくで卓に突っ伏していた。

ガウは料理を早く食べたいと目を血走らせていた。

ミコトは目の前の光景にドン引きしていた。

そしてマサルは・・・

箸を持ったまま痙攣し床に倒れていた。

「料理を手伝ってほしい？」

依頼を解決してもらった礼を言い、ヤンが「良庵」を訪れた際、  
珍しくマサルが依頼をかけたのである。

「ええ、お礼は弾みますよ。ですから・・・」

「いや、マサルさんからお礼なんて取れないヨ。



「アンタ、何かヤバイ事に関わってるの力？」

「いえ、個人的な理由なんですが……」

「それにしても顔が深刻すぎるヨ……」

言葉の通り、マサハルの顔は今から死地に向かおうとしているかの如く引き締まり過ぎていた。

新しく出来た友人の悩みを解決してやりたい。

その一心で、ヤンは理由を問いただし料理を作る事を決意した。

それは、料理を作る者として腕を問われる大事、

いや、避けては通れない宿命の戦いのようなものだったからである。

それから、2人は何を作るかを数日に渡って入念に打ち合わせを行った。

調理の器具も特注で揃えさせた。

材料の仕入れも2人自ら鬼気迫る表情で吟味を行った。

そして決戦の日を迎え、彼らは惨敗した。

絶妙な塩加減の漬物、1秒たりとも調理時間を見逃さなかった蒸し物、

生の部分と火の通った部分のバランスがジューシーさを醸し出した焼き物、

サクツとした衣に蕩けるような中身がたまらない揚げ物。

その日の2人は料理人として神がかったいた。

まさに、相応しい場で行えば間違いない歴史に名を残すような競演だったはずである。

それが成す術もなく敗れた。

マサハルは無力さを噛み締めるかのように天を仰いで倒れた。ヤンは張り詰めた気力が途切れ崩れ落ちた。

「マ、マサハルさん。これはもう無理ネ。諦めるヨロシ」「し、しかし……」

マサハルの言葉に力はこもっていない。目も虚ろである。

何がここまで彼を駆り立てたのであろうか。

それは男の料理人の、そして親としての意地であった。

「父様、そんな所で寝ると風邪引いちゃうよ」「どうでもいいから、早く食いたいぞ。」

慣れた光景なのであろう。

この時ばかりはミコトとガウは薄情であった。

その様子にヤンは内心ため息をつきつつ、ミコトに向かってこう言った。

「マサハルさんがこの有様だからネ。言いたい事は私が代弁するヨ。お嬢ちゃん、好き嫌いはよくないネ。食わず嫌いはいけないネ。少なくとも、嫌いな物をなくす努力は必要ヨ。」

けどね、それでも食べられないなら仕方ないネ。諦めるヨロシ。お父上みたいに、ここまで追い込むのは馬鹿がする事ネ。」  
「うん。頑張つて好き嫌い直すよ。」

ミコトは目の前の光景、

焼き茄子、蒸し茄子、麻婆茄子、茄子の素麺など、  
ヒノモト、大陸の技術の粋を結集した茄子料理尽くしに奮戦むなし  
く敗れ去った

茄子嫌いのマサハルの姿を見て

(嫌いだからと我俣言うのはやめよう)

と固く誓ったのであった。

その日、マサハルは茄子に取り囲まれるという彼にとっての悪夢を  
見た。

大人の意地は時として、恥ずかしい事を曝け出してしまつものであ  
る。

## 5話：挑戦（後書き）

今回は私の実体験を絡めたお話です。

どうしても食べられないものってありますよねw w

子供の頃は親に反発した件でもありません。

「好き嫌いせず何でも食べる」

「そっちはなんで食べへんねん。」

「大人になつたら別に食べてもいいねん。」

子供に対する親の常套手段ともいえますw

しかし、それは口が裂けても言わないマサハル。

ご愁傷様です。

料理扱った小説で、

嫌いな食材が食べないままって普通書かないよなあw

## 6話・再会（前書き）

今回は料理分は少なめです。

## 6話：再会

少女には友達がいなかった。

周りの人間はいないように扱った。

少女は声をあげた。

- 私はここにいる!! -

けれども、少女の声は誰にも届かなかった。

少女はある日、川原で仲が良さそうな女の子と男の子に出会った。

少女は何回叫んだであろう言葉を放った。

- 一緒に遊ぼう? -

2人は快諾し、日が暮れるまで3人で遊んだ。

それからも3人は、よく遊んだ。

鬼ごっこ、男の子が2人を捕まえられずにヘトヘトになった。

ままごと、なぜか男の子が情けない顔をしてお母さん役をした。

お手玉、不器用なのか投げては少女の頭によく落ちて笑いあった。

しばらくして、女の子が来る機会が減っていった。

少女が訳を尋ねても、男の子は力なく笑っただけだった。

少女と男の子は一緒に遊んだ。

折り紙を折ったり、おはじきをしたりと2人で出来る遊びに変わっ

た。  
それでも少女は楽しかった。

別れの日は突然やってきた。

男の子が知り合いの家にしばらく行くというのだ。

少女は行かないでと泣いた。

男の子は行かないやならないと泣いた。

男の子は友達の証と折り紙で作ったキツネを渡した。

少女はお返しにどんぐりで作った首飾りを2つ渡した。

女の子にも渡してほしいと。

そして約束した。

- また遊ぼうね -

2人は川原で日が暮れるまで遊んで、別れた。

しばらくして、男の子は帰ってきた。

しかし、少女の声は男の子に届くことはなかった。

男の子は日が暮れるまで佇んでいたが、肩を落として帰っていった。

そんな日が何日か続いて男の子は来なくなった。

少女はまた独りになった。

最近ミコトが変だ。

そんな話を常連客の1人がマサハルの耳に入れた。  
所構わず独り言をぶつぶつ呟いているというのである。

「一昨日よ、神社でお嬢を見掛けたんだよ。

日が暮れかけてたんで早く帰れよって注意したんだが、  
誰もいない所に手を振って、また明日って言ったんだ。

誰もいないって言ったなら、そこにいるよって不思議そうに返すも  
んだからびっくりしたよ。

女将さんがたまにしか帰ってこないから寂しいってのもあるだろ  
うが、

大将もたまには家族水入らずで旅にでも行ったらどうだい？」

「心配をかけてすみません。ミコトによく聞いておきます。

温泉にでも連れてってやりたいのはヤマヤマなんですが、

値上げするかツケで飲み食いさせないって事しないと費用を捻り  
出せないですよ？」

「うわっ！？藪蛇かよ・・・まあ一応伝えたからな。」

「ええ、ありがとうございます。」

常連の話にマサハルは首を捻る。

最近、ミコトに新しい友達が出来たと聞いたからだ。

晩飯時には何をして遊んだだのを楽しそうに話す彼女を見て嬉しく  
思っていた。

確かに、マサハルの家庭は町内でも世間から見ても普通ではない。

普通ではないが、それでも上手くいっていた。

ミコトにも店の手伝いなどで負担を強いている部分はある。

母親がめつたに帰ってこない事で寂しがらせている自覚もあり、  
何とかしたいと常々考えている。

解決する方法は分かっているけど、すぐには実行できない。

その事は家族でよく話し合った結果をもったの現状であり、ミコト



も納得していた。

（いかん、それじゃ逃げじゃないですか・・・）

「ただいま。」

思考のループに陥る寸前で我を取り戻すマサル。

ミコトが何時もより早過ぎる気もするが、帰ってきたようだ。いつまでも沈んだ顔をしてられない。

両手で頬をパンツと叩いてミコトを出迎えた。

「おかえりなさい。今日は早かったね。」

「うん、友達とおうちで遊ぶの。」

誰かを連れてきたような口振りだが誰もいない。

「誰もいないようですが・・・」

「父様も見えないの？この子もこんにちわって挨拶してるよ??」

眉を潜めて悲しそうな顔をするミコト。

嘘を言っていると疑う気はないマサルはミコトの周りを凝視する。どれだけ目を凝らしても何も見えない。

しかし、何故か懐かしい気配はした。

「父には見えないし聞こえないですね。ちなみにどんな子なんだい？」

「えっとね、白い着物着ててね、頭にキツネの折り紙のせてるの。女の子だよ。」

マサハルの脳裏に懐かしい思い出がよみがえる。

昔、共に遊んだ少女の存在を。  
その時貰った首飾りはミコトが身に付けていた。

「そっか・・・そうですか。父は晩御飯作りますから、上で遊んで  
いなさい。」

「父様のご飯すつごく美味しいんだよ。父様今日は何？」

献立は決まっている。今決まった。

「後のお楽しみですよ。」

それからマサハルは乾物屋に駆け込んで材料を仕入れた。

店に戻ると鍋に火をかけ材料を煮て、丁寧に灰汁を取っていく。

それが終わると米と一緒に炊き上げる。

炊き上がった飯をお握りにし、皿に積んでいく。

「出来ましたよ。一杯作ったから喧嘩しないようにね。」

「あ！！小豆ご飯だ。」

昔は、一緒に食事をする事がなかった。

少女が何者なのか特に気にもしていなかった。

遊ぶ事で頭が一杯だったからである。

今なら分かる。

なぜ、自分達の前に姿を見せなかったのか。

(いや、それは違う・・・)

自分達が見る事が出来なくなっていたただけのことで、少女は確かに

いたのだ。

そして時は過ぎ、娘の友達として再び現れた。姿は見えないし声は聞こえないが確かにそこにいる。

「久し振りですね。元気にしてましたか？」

積もる話は食事をしながら。

あの時の女の子と結ばれミコトを授かった。

貰った首飾りは、壊れると引き換えに妻の命を守った。

他にも報告したい事は山ほどあるのだ。

「父様、見えるようになったの??」

「いいえ、見えませんよ。ただ分かるんです・・・」

ひとりぼっちの少女は懐かしい匂いのする女の子と出会った。

そして、かつての友達と再会した。

相変わらず見えないし聞こえないが、2人の意思は通じ合っていた。

マサハルは少女が店を訪れる度に小豆飯を振舞った。

大人になった彼には、「座敷わらし”の少女は見えなくなったが、絆は確かにそこに存在した。」

## 6話・再会（後書き）

大学時代に遠野に旅行に行つて記念館を見学したときに、初めてその存在を知りました。

女の子とも男の子とも言われている小さな幸運の使者。

汚れちまった私には見えないでしょうが、  
来てくれる事を祈りますw

## 7話：師弟

ヒノモトとして1つの国家が形成されるまでは、まさに群雄割拠の戦国時代であった。

数々の勢力が現れては消え、次第に大きな勢力に併合されていった。その中で後に「武神」と呼ばれる大久保幻斎、

「東の霸王」と呼ばれるムネシゲの両名に率いられた東西の勢力は長い間、膠着状態を保ちながら小競り合いを続けていた。

その膠着状態から脱した要因として西の勢力を率いるべく幼い頃に女王の地位に就いたツバキの名が挙げられる。

ツバキは西の重臣であった幻斎の庇護を受けながら、無名の若く有能な人材を次々と登用する事で強固な組織体制を確立。そして、「四刃」と称される事となる若者達を配下に収めた女王が争いに終止符を打ち、

ヒノモトと国家の名を変え統一されることとなる。

統一がなされて7年、長きに渡る戦乱の時代から平和な時代への変遷のさなか、

戦のない日々を甘受しながら民はその日を懸命に生きる。

「良庵」もその恩恵に与りながら、商いに勤しんでいた。

トントントントン

包丁で食材を切る音が店内に響き渡る。

今は昼の営業のための準備中。

ミコトとガウは寺子屋に行っているため、マサハル一人で作業を行っていた。

一人で仕込み等を行うのは正直重労働ではあるが、彼にとつては二人の教育の方が大事だった。

相談事を持ちかけてくる常連客も空気を読んでこの時間帯には来店しない。

来るのは突発的なトラブルか空気を読まない者だけである。

バチバチバチバチ

釜から音がしてきた。少しして釜戸の火を消す。

後は蒸らせば炊飯は完了である。

その間にも、マサハルは魚に串を打ち作業の手を止めない。

串を打ち終えたかと思えば、塩漬けにしてあつた野菜を引き上げ一口大に切る。

それが終わると蒸らした釜の飯を御櫃に移す。

蓋を開けると飯の甘い匂いとお焦げの香ばしい匂いがマサハルの鼻腔をくすぐる。

御櫃に移し終えたと残ったお焦げの部分をこそげ落とし醤油で軽く味付けをし握っていく。

幾つかを竹で編んだ弁当箱にいれ、残りは皿に載せる。

漬物と味噌汁を加えて賄いの完成である。

その様子を鋭い目つきでじっと観察している老婆がいた。

若い頃は伶俐な美人で通つたであろう顔立ちで、

背筋もシャンとしている。

彼女は駒鳥屋ヨネ。

マサハルの料理の師匠だった。

「きちんと精進を積んでるみたいだね。」

「ありがとうござ」だけど技術的にはまだまだ甘い部分もあるさね。

「・・・八八八、頑張ります。」

いつも飄々としているマサハルも師匠の前では形無しだった。

生まれた頃から自分を知っている人物を前にすると誰しも同じなのかもしれないが。

「それにあんたぐらいだよ？あたしにそんな料理出してくる弟子は

「他の人達とは店や料理の格が違いますからねえ。

それにいきなり来られても困りますよ。」

「あんたの場合はいつ来ても同じような料理出すだろうが。

それに急にきたからといって料理の味を落とすようじゃ弟子を名乗ってほしくないね。」

ヨネに出した料理はお焦げのお握りに野菜の皮を塩漬けにした香の物、

大根の葉などを具とした味噌汁。

店では出せないが賄いで食べるにはちょうど良い端材料理であった。

ヒノモト一と称されるヨネの弟子の殆どが一流料亭や領主付の料理人になっており、

厳しい修行に耐え切れず途中で挫折した者が一膳飯屋の主に納まる事が

大まかなパターンとなっていた。

マサハルが出した物はそんな最高峰の料理人に出す料理ではない。

他の者が見れば憤慨する所である。

「されど貴賤なし。師匠の教えはきちんと守ってますよ。」

「あんたに師匠と呼ばれると背筋が寒くなるよ。」

「ははは、それはひどいですよ。それより味はどうです?」

「見てわからないかい。」

皮はしんなりしつつもパリパリと歯ごたえを残し、

食べやすいように均一に細切りにされている。

味噌汁の具は柔らかく煮込まれており老体には優しい味に仕上がっている。

お握りも米の研ぎ方・炊き方共に申し分なし。

素材を無駄なく使いきり、元の悪さを技術でカバーする。

料理の真髓の一端を込めたマサハルの腕にヨネはとりあえず合格点を心の中で出す。

「満足していただけたようで。」

「ふん、まだまださね。」

「不肖の弟子ですからね。一歩ずつ地道にいきますよ。」

「そうしな。」

「ミコト達を迎えにいつてきます。ちよつと留守番お願いしていいですか?」

「開店までには引き上げるからね。早く戻ってきな。」

ヨネにとってマサハルは私人としては孫のような存在だった。

料理人としては突飛な発想はするものの決して筋の悪い弟子ではなかった。

ゆえに惜しいと思う。彼が自分の後継者となりえないから。

幼き頃より見知り、彼が包丁を持つようになった理由も知っている。その過程で自己流が身に付き過ぎ基本と心得くらいしか教えられなかった。

本人もそれを分かっており、じっくり直していけば良いと焦っていない。



ない。

（出来ればあたしが死ぬまでに芽が出てほしいものだ。）

長かった戦乱は終わった。

ヨネはようやく来た平和の中でマサハルの将来を案じずに入られなかった

## 7話：師弟（後書き）

余った具材で作る料理って結構雑多な物になりがちですが、酒のつまみにやちよつど良いと思います。

もちろん、お焼きにするなど主食としてもいけますがね。

そろそろ、マサハルの過去編にも手を付けようと思ってます。設定集みたいなのも作ったほうが良いですかね？

8話：友人（前編）（前書き）

投稿が遅れてしまって申し訳ありません。  
そして今回は料理分がありません・・・

## 8話：友人（前編）

その日、マサハルは突然の訪問者にうんざりしていた。その客が「良庵」を10日連続で訪れたからである。

しかも、料理を注文するでもなく依頼をするだけ。

断つても翌日にまた来て同じ事を繰り返す。

はつきり言つて商売の邪魔である。

しかし、腕づくで退ける事は出来なかった。

その訪問者はヒノモトの役人であったのだ。

「何度来られても無駄ですよ。」

マサハルの返答は遠慮の欠片も無かった。

最初は丁重に断った。

「他にも適任者はいる。」

「客でないなら依頼は受けない。」

など、手を変え品を変えて断り続けた。

しかし、断るごとに高圧的になる役人を相手にするのが面倒になった。

とにかく面倒になったのでマサハルはある条件を持ちかけた。

「国の正式な命令書を持つてくる事」

本来なら女王が各部門を統括する重役達が発行する公式な文書。

こんな場末の飯屋に赴くような立場の役人が持てるような物ではな

い。  
これで寄り付いて来ないだろうというマサハルの目論見は悪い方向で裏切られた。

ニヤニヤとほくそ笑んだ役人は命令書を持ってきた。

これで自分に逆らい続けていた男も従わざるをえまい。  
ある種の征服感に満ちていた役人を見るマサハルの表情は憐憫であった。

「お断りいたします。」

「なっ……！？ 貴様が言い出した事だぞ！！」

「そもそも、この種の事柄に関しては当人達が嫌だといえればそれまでなんですよ。」

命令書なんて作れる訳がないんです。」

「ただの飯屋の主がそこまで分かるはずがないだろ！！ 貴様、よもや初めから騙すつもりであったか。」

まさか自分が飯屋の主如きに手玉に取られるとは考えてもいなかった役人は、  
完全に頭に血が上ってしまふ。  
マサハルは真っ赤になった役人の顔を見て肩をすくめ諫めようとする。

「何度断ったかと思っただけですか？ 今なら文書の偽造については口を閉ざしますが。」

「うるさい！！ そんな事しなくても、私が上に掛け合えばどうとでもなる！！」

武士が、役人が町人に馬鹿にされる。

それは、支配する側の役人達にとってあってはならない事であった。

そうなった場合の対処法は存在した。  
それが無礼射ちである。

鞘から刀を抜く役人。  
それを見てもマサハルは全く動じなかった。

「店内では抜刀を厳禁にしてるんですがね？」

「黙れ！！これは正当な無礼射ちである。取り消してほしくば土下座して詫びろ！！」

無礼射ちは支配階級である武士の威厳を守るために定められた特権ではあるが、行使する際には様々な制約も存在した。

その制約のために、あまり行われないのが現状であった。

この場合は、

- ・マサハルの抵抗は当然の権利である。
- ・返り討ちにあって生き延びた場合、不心得者として家の断絶もあり得る。
- ・役人の正当性を証明する証人を用意する必要がある。  
などが挙げられる。

マサハルにとっては、自身の抵抗の正当性を証明できるし、そもそも負けるつもりがない。  
後々営業に差し障るのが面倒なだけであって、やってもやらなくてもどうでもよかった。

「いや、別に無礼射ちなんですから掛かってくれればいいじゃないですか。」

当然抵抗もしますし、なった場合でも貴方にとって面倒になるの

では？」

どうでもいいが、ミコトやガウに迷惑はかけられない。

そう考えたマサハルは役人を諫めようとする。

しかし、頭に血が上った役人の耳にはどんな言葉も入らなかった。

そして、「良庵」にのつての禁句を最悪のタイミングで発してしまった。

「こんなチンケな店など、私の力があれば取り潰す事も出来るのだ  
！！」

さあ、這いつくばって詫びるか大人しく切られるか選べ。」

マサハルの表情は変わらない。

しかし、自身の持っている権力に気付き、マサハルが押し黙った状  
況に

彼が怯えていると恍惚としている役人は変化に気付かなかった。

「お前、今なんて言った？」

「良庵」の肉体的接客担当のガウの乱入である。

ガウは右手で役人の襟元を掴み上げ、左手で役人の手首を握り締め  
る。

そのあまりの握力に耐え切れず役人は刀を取り落としてしまう。

「き、きしゃ「お前、何もしゃべるな。「ひいつ!?!」」

ガウの眼光の鋭さに抵抗しようとした役人は射すくめられてしまう。  
ジタバタと動いてみたものの次第に首を掴まれた猫のように大人し  
くなってしまう。

「主、俺はちょっとこいつと話をしてくるぞ。」  
「お役人にあまり乱暴はしちゃいけませんよ？」  
「分かってるぞ。」

ちよつとゴミを捨ててくると言わんばかりのガウと遊びに子供を送り出すかのマサル。

先ほどまでとは一転して、空気が軽くなる。  
どんな修羅場でも一瞬で氷解させてしまう。そんな雰囲気をも二人は持っていた。

さて、役人を持ち上げたまま路地裏に入ったガウ。  
面倒を起こす客にするのと同じように役人に話しかける。

「主の飯はよ……」

「主の飯はよ、美味しい事は確かだが一番じゃないぞ。  
出してる料理も料亭のような上等なシロモンじゃないし使ってる材料だつて特別じゃねえぞ。」

「なにより主自身が一番の料理人でもねえぞ。」

頭の悪い話し方ではある。しかし、口調の熱から彼の本気の度合いがにじみ出てくる。

襟元を持つガウの腕にさらに力が入る。苦しいのか恐怖からか役人の顔色が

蒼白になるのも構わずガウは更に言葉を続ける。

「だからよ。客として飯を食いたきゃ文句は言わないぞ。  
不味いなら不味いと言っつていい。」



ただし、店潰そうと思うんなら・・・覚悟を決めるんだぞ。」

ガウは食うことは好きでも料理を作る事に興味はない。

しかし、マサハルとミコトと仕事をする、共に過ごすという事は何よりも大事だった。

ゆえに二人に危害を加えるもしくは悲しませる者は彼にとって等しく敵であった。

「どんな奴が客だって、悪いことすれば俺が叩き出すぞ。」

それで、お嬢や主に手を出そうってんなら俺が叩き潰すぞ。」

彼にとつての天誅を下すべく、ガウは拳を握り締める。

指を折り曲げるたびにゴキゴキと音が鳴り、相当な力で握られる事が明らかになる。

ガウは殺す事は考えていない。1発殴って2度と近寄らなければそれで良かった。

役人は自分の死を直感し、「ひっ」と悲鳴を漏らす。

「そこまでにしてもらえないか？」

路地裏に別の男の声が響き渡る。

ガウは殴ろうとしていた手を止めた。

その声の持ち主を知っていた。

その人物はマサハルの友人でヒノモトの重役。

そして、食えることよりも戦うことが好きなガウの「腕試し」の標的の1人でもあった。

「なんだ、ヒスイのおっさんか。」

「おっさんはひどいな・・・俺はお前の主と同じ年なんだが？」

「主は主だ。おっさんはおっさんだ。」

「訳が分からないな。それよりもだ、その者を解放してもらえないか？」

「顔が真っ青で死にそうだ。」

「・・・ふんっ。」

どさつと役人を落とす音が生じる。

役人は我に返ると這い蹲りながらアタフタとその場から消え去った。後に残るはガウとヒスイと呼ばれた男。

両者は見詰め合いつつもいつでも動けるように構える。

ピーンと張り詰めた緊張感が周囲を覆う中、膠着を打破したのはヒスイだった。

溜息を付き、構えを解く。

「なんでお前の店に飯を食いに行くだけでこんなに疲れなきゃならんのだ？」

「俺が戦いたいからだぞ。けど客なら仕方ないから諦めるぞ。」

あからさまに残念そうな表情を浮かべるガウ。

両手を頭の後ろで組み何事もなかったかのように会話を続ける。

「そうしてくれると助かるな。」

「“四刃”とやる機会って全然ないからつまらんど。」

「こつちにも公務というものがあるのでな。そうそうやり合えんさ。」

「四刃」。

女王ツバキが登用した若者達の中で大小様々な任務をこなしてきた4人の武の英雄達。

現在この4人はヒノモトの家老職についており、国家の舵取りを担っていた。

巨軀で敵陣に殴りこみ、時には味方を守る壁になる重装の武士「鋼刃」斉藤富嶽。

精霊の力を借りた術で遠距離攻撃に優れ、文にも明るい巫女「精刃」斉藤琴音。

苗字から推測される通り、この2人は夫婦で生まれてくるであろう子供は、

次代のヒノモトを担うであろうと期待されている。

圧倒的な速さと身軽さで敵を翻弄し、美貌から舞姫とも称された剣士「空刃」大久保刹那。

ヒノモト統一の際に先代当主が領土の殆どを返上し、実質的な力は殆ど失ったものの、

「武神」大久保幻斎の威光と共に隠然たる影響力を保持している大久保家の現当主である。

そして、ガウの目の前にいる人物は、「武神」が引退した今、現役最強と言われている

希少な技術である陰陽術と剣術の両方を駆使し距離を選ばず戦える

武士「妖刃」石橋飛翠

その人であった。

## 8話：友人（前編）（後書き）

こんな時間の投稿で頭の中がボーっとしています。  
しかも料理を絡めるかどうかが最後まで悩みました。  
悩んだ末、前後編になりました。

また、新キャラです。

とりあえず、ガウとヒスイは準最強キャラです。

バトル？難しい事は書けません。

マサハル？最　キャラの予定ですw

## 9 話：友人（後編）

飛翠を伴ったガウは「良庵」へと帰還する。

マサハルは先ほどの騒動がまるで無かったかのように平然と準備を行っていた。

「今、帰ったぞ。」

「邪魔するよ。」

「おや、これは珍しい。“妖刃”様がお越しとは。」

「やめろ、お前にそれを言われると気色悪い。鳥肌が立つ。」

「それはなんとも酷い言われようですね。邪魔するなら帰ってください。」

「おいおい客に向かって帰れないだろ。帰れは。」

皮肉の応酬にも思われる一幕。

しかし、他愛もない会話の中の澱みない掛け合いが二人の関係を端的に表している。

もうかれこれ10年以上の腐れ縁。それが二人の関係だった。

当然、そんな会話を交わしながらも野菜を切ったり鍋の火を確認したりとマサハルの手は休まない。

「私の料理は1番じゃないですか？」

「1番のつもりじゃないと思ってたぞ??」

「ははは、その通りです。そもそも1番の料理って何なのでしょうねえ。」

「俺は腹一杯食べれば文句はねえぞ。」

「ガウの腹一杯は普通の人の10人前を超えるでしょうに。」

（料理人の姿が板についてるな。）

出された酒を飲みながらガウと軽口を叩き合うマサハルの動きをじつと見つめる飛翠。

彼の料理に対する熱意は昔から知っていた。ヒノモトの男児たるもの身の回りの事は

出来たほうが良いという異端の考えを持ち、炊事洗濯裁縫など家事に関してそこらの主婦顔負けの腕前だった。特に貧しい食材でもそれなりの料理に仕立てあげる様子に女であれば惚れてたかもと戦慄を覚えたものだった。

「旨い物を食べれば、幸せな気持ちや頑張ろうという想いが沸くものです。」

それは西も東も人間も妖も老いも若きも関係ありません。皆思う事なんです。

刀で殺す事や守る事は出来ず。しかし料理のように人を癒したり幸せにしたりは

なかなか出来ないんです。」

なぜ料理にそこまでこだわるかを尋ねた時にマサハルから返ってきた答えだ。

それと同時に出された汁物は戦場で疲れた飛翠の心を癒し、何杯もお代わりした事を

今でも覚えている。そしてその後遠い目をして冷たく放った言葉は忘れられない。

「旨い物を食べれば死にたくないと考え命を大事にする。この戦を頑張つて生き残ろうと

奮起する。逆に飯を抜けば死に物狂いで奪おうとし死に対する恐怖を薄れさせる事もある。飯とて使いようによっては武器となるんです。」

「たくさんの人が死ぬんですね。だけど躊躇する事は出来ません。」

終わるまで戦は続くからです・・・やはり戦は嫌いです。」

当時戦嫌いを公言すれば臆病者の謗りをまぬがれなかったが、マサハルはそれを気にも留めていなかった。周囲が眉を顰める中、武功を求めず

（そして戦は終結した。ヒノモトも平和になって今じゃ皆それぞれの道を歩んでいる。

それでもやはり「あ、飛翠殿?!?）」

「・・・どうした?」

回想を遮られ生返事を返す飛翠にマサハルは先程役人に渡された文書突き出す。

「こんな事をされても困りますよ。」

なぜ、先程マサハル達が役人と揉めていたのか得心した飛翠は改めて文書の内容を確認する。

簡単な内容としては「良庵」店主、軍学校料理番に任命する。店員ガウ、軍学校入学を命ずる」とあった。そして差出人には「斉藤琴音」と書かれていた。

「さすが大久保良太と激しくやり合った“精刃”様。真面目な事で。」

「これは・・・お前分かってて言ってるだろ?」

「理解は出来ませんが分かりたくないですね。」

「良太なら鼻で笑って破り捨てそうだな。」

ヒノモト統一後、軍縮に伴い徴兵制は廃止され、軍への入隊は基本

的に志願制となっていた。また入隊にあたって軍学校にて基本要項を学習した後に任地に配属される事になっていた。マサル達の学校への加入は強制は出来ないが、“四刃”がこういう形で権力を行使した場合、普通なら逃れる事はまず無理であった。マサハルの軽口も自分と彼との間柄であるから聞き逃せることだった。

「いや、私が言ってるのはそこじゃありませんよ。どう考えても女子の書く字じゃないでしょ。それに花押も違いますしね。」  
「はあ!？」

慌てて字を確認する。なるほど、達筆ではあるがどう考えても男が書いた文字だ。それに、本人だという証明の花押も似てはいるが違う。ここで考えられる可能性は1つ。偽造文書の作成である。

「こんなのが横行していたら国が乱れますよねえ？」  
「・・・そうだな。」  
「これを取り締まるのは誰のお役目でしょうねえ？」  
「・・・俺だな。」

齊藤琴音は国の政治を司る職務に就いている。夫の富嶽は軍事を、大久保刹那は教育を担当し、そしてマサハルの目の前にいる飛翠は治安の担当であった。  
そして、これにより判明した事がある。

「また、しばらく家に帰れませんねえ？奥方殿が怒るのでは？」  
「・・・分かってて笑うな。腹が立つから」  
「私も追いかけられたくないですよ。」

四刃の権力は大きい。そのせいでこなす仕事の量も半端ではないのだ。しばらくは城に寝泊りしての連日徹夜の作業が続くだろう。



「くそつ！！こんな時、良太が居れば面倒がないのに……。」  
「エドで仕事している人間にそんな事を求めても無駄でしょう。大事なのは今自分が何をするかですよ。」

「……ソウダナ。」

大久保良太。

幼き頃よりツバキに仕え、敵方の王ムネシゲをして、「武は凡庸なれど、戦を極めし者」と称されるほどの男だった。統一のきっかけとなる最後の決戦前に強引な手法で大久保家頭首に就任。広大な領土の大半を返上する事をツバキに確約し後の妻となる刹那に座を譲り渡した。現在はエドに拠点を構え、東方の統治を任じられている。

「ま、これでも食べて今晚から頑張ってください。」

マサハルは笑いながら親子丼を差し出した。一口食べる。鶏肉の弾力と半熟の卵のかからんだ飯が絶妙に合う。かかっているタレも甘辛く飯だけでもかき込める。

（事態が解決したら絶対ぶん殴ってやる。）

これから城を揺るがすであろう騒ぎを持ち込む原因である男の作った食事を飛翠は貪り食うのであった。

9 話：友人（後編）（後書き）

難産でした。仕事の不調もあったからかも知れませんが、もうちょっとと要領よく出来なかったかなあ・・・。

## 10話：親子

休日の朝。それは人々にとって情眠を貪りたくなる特別な時間である。マサハルもご多聞にもれず、この日はミコトやガウにせがまれようが少しだけ長く寝ようとしていた。しかし、その眠りは普段感じない違和感によって妨げられた。

(ん？冷たい？)

外がそんなに暑くもないし寝苦しい夢を見て汗をかいたわけでもない。寝巻きと布団にヒヤリと濡れた感触を覚える。寝ぼけて外で突っ伏しているわけでもない。まどろんだ意識が徐々に醒めていくうちに分かった出来事に懐かしさを感じる。

(あゝ・・・そうだった)

マサハルの目に飛び込んだ光景は布団の上に来た水溜りと、マサハルに抱きついて泣いている少女の姿だった。

「・・・ごめんなしやい。」

「厠に行きたくなったら起こしなさい。それに寝る前に水も飲まないようにしないとね。」

ぐずる少女の体を拭いてやりながら慰める。

マサハルはこういう事に関してはあまり怒らない。叱り方を知らないのではなく自分にも覚えがあり、子供の頃には誰でもやる事だろうと考えているからだ。親として大事なものは焦らず少しずつ直して

やる事。それがマサハルの持論だった。それに、マサハルには少女に対して負い目があった。

「全然怒ってないから泣くんじゃありません。私や母様だってやっ  
てたんですから。これから頑張つて直しましょうね。」

「ん、アスカがんばる。」

「よろしい！！ご飯にしましょう。食事の準備をしますからアスカ  
は姉様達を起こしてください。」

「はい、とうしゃま。」

アスカ。

普段は別の場所で母親と暮らすマサハルのもう一人の娘。そんな彼女が“良庵”に来たのは、先日起こつた騒動（前話参照）のせいだった。

マサハルの指摘により行つた飛翠の報告は城の上から下までを揺るがす大騒ぎとなつた。事態を重く見た女王ツバキは首都ヤマトを中心にヒノモト中の役人に事態の糾明にあたらせた。実際に偽文書を書いた者、悪用した者には厳罰が科せられ人員の抜けた部署はさらに混乱。その穴を埋めるべく役人達は奔走していた。その影響でアスカの母親も城に朝から晩までこもる日が続き、マサハルがしばらく預かる事になつたのである。

「さて、今日は何をしましょうか。」

朝食をとりながらマサハルはアスカ達にその日の予定を尋ねる。アスカが来てからは店を開けていない。貯えに余裕があつた事と久しぶりに会う娘との触れ合いを優先した結果であつた。ミコトも妹と遊べるために大喜びで、ガウは雑事から解放されることに喜んだ。アスカが店を手伝うと言い出した事もあつたが、

「アスカちゃんがもう少し大人にならないと危ないよ。」

「おとなって？」

「夜に一人で厠に行けるようになる事だよ。」

「（ブルブル）・・・がまんしゆる。」

というミコトの説得があったとかなかったとか。

ともかく、絵を書いたり将棋を指したりとマサハルが子供達のやりたい事に付き合うという形で唐突な連休をダラダラと過ごしていた。

結局その日は料理を作ろうという結論になり、団子を作る事になった。

粉に湯を混ぜよくこねる。ちぎって丸めた生地をお湯で茹でて冷やす。

簡単な作業のだが、子供も混じってやる事である。なかなか想定通りに進まない。

「みてみて。ウサギさんだよ。」

「ねえしゃま、すごい。アスカはへびしゃん。」

「あ、もう少し大きくしようね。食べる前にちぎれちゃうよ。」

こねて丸める作業が面白いのか娘達が遊び始めたのである。食べ物で遊ぶと怒る事も考えたが、自分で責任もって食べるとミコトがアスカに教える様を見せられるとそんな気持ちも霧散する。

（我ながら甘いし、良い娘達をもった。これが親馬鹿ってやつですよ。）

マサハルは親の顔を知らない。物心つく前に死別していた。親代わりの人間達から愛情を受けて育ったおかげか寂しさを感じる事はなかったが、彼等から揃って聞かされた。

「お前の両親は死ぬ間際まで愛情を精一杯送っていた。」

その愛情に応え得る人間となったのかは分からない。そもそも、途中まではそんな事を考えた事すらなかった。それでも自分なりに恥じないように生きてきたつもりだった。しかし、親となった今は与えるべき対象に寂しい思いをさせている。

アスカに、そしてミコトに。

「とうしゃま、いつおうちに帰ってくるの？かあしゃまもさびしいっていつてるよ？」

休みが続いたある日、アスカに字を教えている際に聞かれた言葉である。

それはマサハルにとって生きてきた中でも上位に入るほど、心に突き刺さった言葉であった。非常に堪えた。目付きや顔立ちによって終始笑っているように見られるマサハルの表情が崩れるほどだった。

「アスカとかあしゃまのこと、嫌いになったの？」

「父様はアスカやミコト、母様の事が大好きですよ。アスカが将来美人さんになるというくらい本当の事ですよ。」

その言葉に嘘はなかった。家族のためならどんな事も成す。それがマサハルの信念だったからである。しかし、それでも今のいわゆる別居の状態は続けざるを得なかった。

「きつと家に戻って皆で仲良く暮らす日が来ます。」

「やくそく?」

「ええ、約束ですよ。」

「アスカまつ。とうしやまとかあしやまのむすめだもん。」

「はは、アスカは母様にとても似てるから、きつと強くなれますよ。」

数日後、交わした約束を胸にアスカは家に戻っていった。これが後にマサルをある方向へと駆り立てる事になるのだが、それはまた別のお話。

## 11話：夫婦（前書き）

今回は奥様登場で恋愛シーン（？）を出してみました。  
恋愛シーンって難しいですね・・・



## 11話：夫婦

桜色の着物を身に付けた女性が夜道を歩いていた。

艶のある黒髪と整った目鼻立ちをした目の覚めるような美女である。女王ツバキのお膝元として治安が良いヤマトでも、ごろつきやチンピラなどは存在した。

当然の事だが、女性が夜道を一人で歩けばそんな彼らの触手に引っかけられてもおかしくはない。

そんな事になれば連れ去られ毒牙にかけられるのが関の山である。決して褒められたものではない。

実際に彼女を見つけ、ちよっかいを掛けようとした者は大勢いた。しかし、彼女には誰も声をかける者はいなかった。

通り過ぎるたびに崩れるように倒れてしまったからである。

そして彼女は何者にも邪魔されることなく悠々と目的地に向かっていくのであった。

その日の営業も無事終わり、片づけが済んだ後の「良庵」。

ミコトとガウは床に入り、マサルは一人酒を飲んでいた。

酒と料理を出す関係上、酒を口にする事の多いマサルだが、然程酒に強いと言うわけではなかった。

帳簿を纏めながら舐めるようにして猪口の酒をチビチビと飲み、その間に翌日の献立を考える。

家事、子育て、仕事などで一日を費やすマサルにとって、この時間帯が唯一自分の時間を

使える一時であった。

「今日もミコトとガウは頑張ってくれました。おかげで黒字でしたよっと。」

商売つ気をあまり持たないマサハルも店の黒字が続く事は嬉しい事だった。

算術は苦手なので筆は中々進まないが、その時の気分で鼻歌を歌いながら

確実に欄を埋めていく。

「明日は大根と鯖が入ってくる。塩焼きは決定として、大根で何かしたいですね・・・」

煮込む？焼く？大根で餅を作る点心があるとヤン殿が言ってましたが・・・っ!？」

突然ピタッと筆が止まる。マサハルは目を閉じたため息を吐き、席を立ち調理場へ向かった

マサハルには人より直感が働く事が度々あった。マサハルを知る者のほとんどが、

その直感に助けられたと語っていた。しかし彼としては自分が臆病な性質であると

自認しており、嫌いだった故にきちんと生き残る準備をしたからこそ激しい戦争を

生き抜いてこれたのだと自負している。

もし自分に直感があるとするならば、絶対に外さないと自慢できる機会。

「おかえりなさい。」

「ふむ、ただいまと言っているのか？」

マサハルにとって絶対外れない直感の働く機会。それは愛する妻の帰宅時であった。

店内はゆっくりとした時間が過ぎる。

酒をコクリコクリと飲み干す妻。その姿は絵になるほど妖艶であった。

「かあくっ！！務めで疲れた身体にひやを更に冷たくした酒は染み渡るな。」

さぞかし人気があるのだろうか」

しかし、飲んだ後に吐く言葉はかなり男らしかった。

「こんな手間と金をかけた物、なかなか売れませんよ。」

手間がかかるだけならまだ良いんですけどお金がね」

「出来る品と出来ない品、そして出来ても売れない品があるという事か。」

「それが商売ですからね。」

出したのは酒と数品のあて。どれも、どこの店にも出てくるようなありふれた物だった。

マサハルは妻に出した料理にありったけの工夫を施した。

工夫の肝は単純明快。それは氷だった。

ヒノモトにおいて製氷と保冷の技術は決して高くはなかった。

氷も氷室も存在するが、その希少性から氷は一般市場には滅多に出まわる物ではなかった。

そこでマサハルは井戸掘りや山の採掘技術を駆使し、付けのあつた大工を総動員し地下深くに氷室を構築。冬に大量の氷を作り、そこに運び込んだのである。

氷があると出来る事が増える。とりわけ大きかったのは食材を保存する事が可能になった事。

特に物が傷みやすい夏場は非常に重宝した。そして不思議な事に一部の食材に関しては旨味が増した。

もう一つは、冷奴や冷たい汁物など料理のレパートリーが増えた事。「冷たい料理が一層冷たく」。これがヤマトの住民に大受けした。

マサハルの工夫はそこで終わらない。

ヒノモトの酒でひやは常温を意味する。それを氷室に持ち込んでさらに冷たくする。

その際に持ち込む酒とひやで用いる酒は全く味の異なる物を採用した。

冷たくする酒は雑味の少ない、いわゆる「きれいな酒」を酒屋に特注。

その澄んだ伶俐な味わいは酒好きを唸らせるのだが、さすがの「良庵」でも

特注の酒に安い値段を付ける事は叶わず常連達も年に数回呑めるかと言つ程の幻の逸品だった。

「冷たい酒に、この熱い天ぷらがまた合うな。鳥や野草が何時もと違う味をしている」

「疲れてるでしょう？しつかり食べてもらわないと心配でなりませんよ。」

「その騒動の大元が何を言うか。お前と会うなら殴つといてくれと言ふ奴もいたんだぞ。」

「それは勘弁してくださいよ。っと、次が揚がりましたよ。」

苦笑いしながら差し出す天ぷらにも工夫がある。

粉を溶く水は氷室で冷やす。それがあげた際にサクサクと軽い食感を演出する。

天ぷらに付ける塩も舌がなじみやすいように磨り潰してさらに細かくする。

冷えた酒が衣の油っぽさを程よく洗い流し熱の通った食材の旨味と調和する。

揚げる食材もドクダミなどの野草や鶏肉、南瓜など疲労回復に良いとされる物ばかりであった。

一口食べるたびに表情を変える妻の顔を見てマサハルの顔もほころぶ。

美しい妻と共にいる事がマサハルの幼い頃からの望みだった。そして子供も出来た。

お互いの考えている事は言わなくても大抵分かる結び付きが深く、両親のいないマサハルを妻は母代わり、姉代わりとして育ててくれた。

しかし、別れて暮らしているのが現状だ。妻も理解している。

共に暮らす事、それはマサハルにとって得る物と失う物が大きすぎ、なかなか決断に

至らなかったのである。

「あの頃に比べて良い顔をするようになった。」

ポツリと妻がつぶやく。

「その様子だと心の底から楽しいと思えるようになったのだな。」

「そうですね。やっぱり料理が好きなんだなと実感してますよ。」

スツと妻の持つ猪口に酒を注ぐ。頬には朱がさし、猪口を傾ける姿はマサハルから見て妖艶さを増していくように思えた。ぼおつと見蕩れてしまう。

「ふっ・・・お前も男だからな。我も罪な女よ」

「からかわないでくださいよ。」

心中を見透かしたからか酒が入っているからなのか、ここぞとばかりにマサハルをからかう妻。

ほれほれと着物を微妙にはだけてみたり、胸の谷間を見せたりで狼狽するマサハルを楽しむ。

昔から上下関係は決まっていた。下のマサハルもそれを然程気にすることもなかった。

何年経とうと変わらない時間と関係。それが二人の世界を作っていた。

その後も店の事やミコトの事で二人の会話は盛り上がる。

酒の入った徳利が何本か空いた頃、妻がマサハルに尋ねる。

「そろそろじゃないか？」

「・・・ごめんなさい。まだ時期尚早なんですよ。」

「そうか・・・」

それだけで意思が通じ合う。そろそろ戻って共に暮らさないかという意味である。

決して夜の生活のタイミングの事ではない。

別れて暮らす事を提案したのは妻だが、意外な事に戻る事を拒否しているのはマサルだった。

「好きにするが良いさ。お主が納得するまでとことん追えば良い。ミコトにも見せたい物を

見せればいい。されど終わりは否応なく来てしまうのだからな。」

「ごめ「謝るな。」」

「謝らないでくれ。本当はお前達と四六時中共にいたい。お前が愛しい。ミコトが可愛い。

血が繋がってないとはいえ、アスカも我が子。あれの寂しがる姿を見るのもやるせない。

「じゃが今を捨てる事も許されまい。それが我の運命であり限界なのだ。」

マサルにとって妻の悲しむ顔を見るのは昔から死ぬほど嫌だった。しかし、現在悲しませているのが自分だというのは苦しかった。

妻の言う運命や限界は幾らでも破れると思っていたし、事実それだけの力を備えていた。

しかし、それは己にとっても妻にとっても重要な存在でもあった。

結局は取るべき道は

最初から一つだという事も分かっていた。

見る人が見れば妻の言葉は泣き落としてもあった。

「分かって言うのは卑怯ですよ？私がそんな器用な道を取れない事を一番よく分かっているでしょう。」

「くくつ……確かにな。」

「はあ……どの道、戻るつもりではありません。今宵が良い切っ掛けかもしれませぬ。」

「おいおい、時期尚早と自分で言っただではないか。」

「すぐに戻りません。まあ、最後に我俣を言いますがね。私も大変でしょうがそれ以上に周りが混乱するでしょうねえ」

「・・・その時はお手柔らかに頼むぞ？」

そう言つて妻は階段を上つていった。愛娘の姿を見るためである。マサハルはというと、大急ぎで天ぷらと握り飯を拵える。数は10人分。

時間は多少かかるだろうが、妻はミコトの髪をなでたり、頬をプニプニと突付いたりしてしばらく過ぎるのが定番だった。

竹筒には水を入れ、握り飯は竹籠に天ぷらは笹の葉に包む。それらを大きな風呂敷に包み込み、固く何度も結ぶ。

風呂敷をもって店の外へ出ると、おもむろに屋根に向かって放り上げた。

落下を確認せずにマサハルは店内へと戻っていく。風呂敷は綺麗な放物線を描き、落ちる音を発すること無くパツと掻き消えた。

やがて満足したのか妻が降りてきた。

「出してくれたのか？」

「一人分かりやすいのがいましたが新参者ですか？」

「さあな、誰が未熟か我には分からぬよ。」

「それはそうですね。ところでミコトも大きくなつたでしょう？」

「ああ、ミコトの可愛い寝顔も存分に拝見した。」

「今宵はお帰りです？」

「馬鹿者！！相変わらず鈍いなお前は。夫婦の睦みに決まっておる



だろう！！」

馬鹿だの鈍いだの言われても、この辺の妻の思考を読み取る事はマサハルには

なかなか難しかった。時々妻は自分の都合を考えず平然と巻き込んでしまうからである。

「明日も店はあるんですがね。」

「我は休みだ！遅くまで寝るぞ。その後はミコトと遊ぶとしよう。」

「・・・まあ、いつもの事ですか。」

「ふふふ、今夜は寝かさんぞ。」

「いつも堪忍してくれって言うのはツバキじゃないですか」

溜息をつきながらも妻の体を抱き上げマサハルは寢所に消える。

マサハルという名前は、彼にとって本当の名前ではない。

本当の名前である「征遥<sup>セイヨウ</sup>」をもじったものである。

妻の名前は椿。真正正銘、ヒノモトを統べる女王。

マサハルの本当の身分。それは王配あるいは王婿と呼ばれるものであった

## 11話：夫婦（後書き）

あっさりとした身分バレ。

けど、これ以上引つ張るのも億劫でした。

私の不徳の致す所です。

そんな作品を見捨てずにお気に入り登録をいただいた方々、  
まことにありがとうございます。

おかげさまで100件を超える事ができました。

これからも精進していきますので、皆様よろしく願います。感想もお待ちしております。

最後に、一言。

串かつにビール、天ぷらに冷酒。

それが私のジャスティスですww

## 12話：密室にて（前書き）

今回は料理分を含まないシリーズです。

総合評価が一気に上がりました。

レビューやたくさんのお気に入り登録ありがとうございます。  
この場をお借りしてお礼申し上げます。

## 12話：密室にて

ヤマトにそびえる城内。

その一室にて四人の男女が神妙な面持ちで輪を囲み座っていた。

その中には石橋飛翠の姿もあつた。彼らは総じて四刃と称される者達。

ヒノモトの舵を取る首脳陣であつた。

「さて、報告を聞かせてもらおうか。」

一際大柄の男・斉藤富嶽が重々しく声を発した。装束がはちきれんばかりの筋肉を纏つた威厳ある顔の持ち主である。

「俺の管轄はとりあえずは沈静したといつて良い。後は統一後3年分の洗い出しだ。」

その処遇に関しては、お前達の助言も貰う事になると思う。よろしく頼む。」

疲れきつた顔で報告をする飛翠。事実、4人の中で最も仕事量の多かったのは

治安を受け持つ彼だった。報告書を持つ手にも震えが出るほど疲労は困憊していた。

「うちは特に問題はないわ。口利きでの不正な入校は出来ても甘っちょろいのは教練で

淘汰されるだけ。淘汰されないって事は基準には達しているから問題なくあんだ達に渡せる。

配属時の相性で多少の閹が生じるのは否定しないけど、教官が厳しく仕込んでるからね。

後々に響く事は少ないと思うわ。そもそも、今回の用件は元々仕官していた人間が

起こした事だから良い反面教師が出来たと言っておくわ。」

快活な口調で自論を展開するは大久保刹那。教育を担当する彼女の顔に疲労はない。

規律が厳しく定められた学内での不祥事はなく、教官も識見に富んだ人物ばかりであったので問題の影響が少なかった。

「私の管轄は政令に関しては問題なく行われていた。最も、違和感があれば

すぐにばれていただろうがな。だが人事・資金の面でかなりの作為が見られた。

これはすぐに対処できる問題ではない。部署を刷新するにしろ混乱が生じ、

政事が滞るからな。時間はかかる。」

伶俐な美貌で淡々と述べるのは斉藤琴音。政務はその大部分が女王椿の直轄するものであり、

その補佐に過ぎない彼女ではあったが小さな犯行の積み重ねで件数が一番多かったとはいえ、

椿の指示によるルーチンワークをこなしていただけのため負担が予想より少なかった。

「わしの担当は全く問題なかった。」

3人の報告を受け、疲れたように自分の発表を行う富嶽。軍事に関しては全く影響を受けなかったために、他の者が真相究明に当たっている間、椿と連携して全ての部署の現状の対応に奔走していた。

「うらやましい限りだよ。」

「うちの旦那の薫陶厚き連中だからね。」

責めるように呟く飛翠とは対照的に自分の手柄のようにつれしそうに胸を張る刹那。

「一罰百戒の件があつたとはいえ、ここまで規律が行き届くとは正直わしも想像できんかった。」

「あの馬鹿でも役に立つような事があつたのだな。」

ため息をつく富嶽と機嫌が悪くする琴音。

彼らの脳裏には一致してある人物が浮かんでいた。各人思う所があるのか空気は重くなる。

場を変えようと話題を切り出したのは飛翠だった。

「そつえば東はどうだったんだ？」

「全く問題ない。信奉者と奴の怖さを知る者達で固めているんだ。魔がさす暇さえないだろうな。」

返書をもらったが、文官共があからさまにこちらを馬鹿にしてたぞ。お膝元でそんな問題

起こして恥ずかしくないのか。負担が大きいならいつでも変わってやるとな。」

返事をしたのは琴音。不機嫌だったのがさらに悪化したのかギリギリと齒軋りさえ

聞こえてくるようである。

「まあ、あの連中と合わないからってそう仕向けたのもあんだだけらね。同情の余地もないわ。

富嶽の手前、言いたくはないけど補佐すら出来てないんだから自業自得もいい所よ。」

刹那は火に油を注がんばかりに言い立てる。琴音をみる目は剣呑だ。刹那と琴音はお互いの事を認め合っており、私的にも仲が良い。しかし、ある一点においては

致命的なまでに対立しあっている。それは刹那の夫である大久保良太についてだった。

上記の言動には自分の夫が遠地にいて、離れ離れになっているのに向こうは夫婦揃って

仲良く仕事をしているという私的な恨みも含まれている。それを理解しているからか琴音は

ふいっと顔を背けるだけで何も言わない。

その態度がさらに刹那を刺激する。

「おいおい、落ち着けて。言いすぎだぞ刹那。」

「琴音も挑発するな。良太殿の事はお前も認めておるだろう」

どんどん悪くなる空気に耐えかねたのか慌てて男性陣が二人をなだめる。

飛翠にとっては何度も見た光景だった。統一前には、戦があった頃にはない光景だった。

そこにあるはずのピースが決定的に欠けていた。

今は東に赴任している大久保良太。彼は5人の中ではリーダーではなくむしろ弄られ役に位置していた。

彼だけがなぜ東にいるのか。それは統一前の大久保家の強大さと本人の資質について

述べなければならぬ。元々、大久保家は大久保幻斎が一代で興した新興勢力だった。

軍でさえ手の出せなかった妖魔の討伐や東の勢力との戦の手柄により先々代の統治者の

信頼を勝ち取り、次第に大きな権限を得るようになった。

その幻斎の雄姿に魅かれ優秀な人材が国家ではなく大久保家に多数集まるようになり、

大久保家は栄えた。

また、孫の良太は個人の武勇の才は幻斎はおるか四刃にも劣り一時期は

「大久保家の落ちこぼれ」と言われたものの、戦の采配や将としての器量は幻斎より

遙かに優れていた。軍に略奪暴行は死罪という非常に厳しい規律などを課し、

事によつては重臣にさえ容赦せず族滅を言い渡す恐怖と仕事や手柄を公正に評価する人望によつて武官を統制した。

加えて自分出来る事出来ない事を把握しそれを補佐する人材を手厚く遇した事から

文官のみならず異能の技術を持った忍びなどの忠誠を勝ち得たのである。



結果、主君たる王家を上回る実力を兼ね備えてしまい様々な場面で軋轢を生んでしまった。

それでも2人は王家に厚い忠誠を誓った。結果、統一後に幻斎への捨扶持分の領土を除く全てを王家に返上、組織を一つに纏め上げたのである。

統一後の課題の中でも重要な懸案事項は当然、元は敵地の東の地の統治についてであった。

緊急時に独自に行動できるだけの才覚、反乱を抑制し民が納得して従うだけの名声を兼ね備えた者、それは“武神”としてヒノモト中の尊敬を集めたまま引退した幻斎を除けば、敵地の王にもつとも評価された人物、「戦極めし者」良太だけであった。

これに条件を付けたのが斉藤琴音だった。椿を心の底から尊敬する彼女に私心はなかった。

しかし、東の地に大きすぎる独自勢力が存在する事が新たな戦乱に繋がるのではないかと懸念したのである。よって彼女は良太の赴任に対して家人は本人のみ、随行する人員は

大久保家の人員でいうと約半分に限定したのである。これには旧大久保家のみならず

四刃からも反対意見が噴出。椿の仲裁と良太本人の承諾がなければ余計な騒動が巻き起こるところであった。

良太は随行を強く望む者の中から自分の苦手な政務を担当する文官を中心に選抜。

最低限の元国軍の兵のみを率いる事で翻意がない事を証明すると同時に権力や戦力を  
ヤマトに集約させ不満分子を隔離させる事に成功したのである。

この経緯から四刃、とりわけ琴音と東に赴いた旧大久保家の文官において緊張状態が発生。

とはいえ彼らは圧倒的な業績をもって将来的に琴音を現在の地位から引きずる降ろす事を

選択したため国の乱れには繋がらなかった。

不安要素は残るものの直ぐに対処が必要な事態にはならなかったのである。

「まあ、これでも食べて落ち着こうぜ。」

険悪な雰囲気を払拭すべく飛翠が差し出したのは稲荷寿司。

「・・・いただきます。」

「分かったわ。」

不承不承うなずき稲荷を手取る女性陣。

甘辛い煮汁を十分染み込ませた油揚げと程よい甘さの寿司飯。

その柔らかい旨さに一口食べた途端、貪るように次々と手を伸ばす。

「これは例の店主の物か？」

「ああ、そうだ。」

「見事な味だ。それにあの一件を暴いた眼力といい本当に軍学校に招いてもいいんじゃないか？」

「嫌がってなかったら、今回の件はなかっただろっさ。」  
「ふむ、それは道理だ。」

マサハルの作った稲荷寿司に機嫌がよくなったのか琴音も饒舌になる。

刹那は特に会話に入らず一心不乱に黙々と食べ続ける。

「刹那。そんなに食べると太るぞ。私が処分してやるから安心して残すがいい。」

「琴音こそ最近腹の周りが気になるって言ってたじゃないの。ただでさえ政務で

身体を動かさないんだから、遠慮したほうがいいわよ。」

さっきまでの空気はなんだったのか、穏やかな様子で稲荷寿司を取りあう二人。

その様子に場をしのぐ事が出来たと男性陣もホッと胸をなでおろす。

まだまだ課題も多く悩みの種もつきないヒノモト首脳陣。

彼らの不安が払拭されるのは、まだ先の話である。

12話：密室にて（後書き）

書けはしたものの重かったです。

固いと自認する文体がシリアスのせいで余計に固く感じられました。  
今回出て来た四刃はどれも重要人物です。

果たしてその設定を活かす事が私に出来るのか。

今からとても不安ですww

### 13話：マサハルの決断（前編）（前書き）

沢山の方々に見ていただけ、ポイントもいただいで、

「どうしてこうなった?？」

と、てんやわんやしております。

ありがとうございます。頑張って作品を書いていきます。

### 13話：マサハルの決断（前編）

マサハルが最近変だ。

それがミコトとガウの持っている印象であった。

時々上を向いてはため息をつき、腕を組み目を瞑ってジッと考え事をする事が多くなった。

営業中でも時々そんな仕草を見せるため、常連達も2人に

「美人なカミさんに大将が三行半突き付けられたのか？」

「ガウの旦那の食い過ぎで商いが上手くいってないんじゃない・・・」  
などと、本人が聞いたら大変な事になりそうな話を好き勝手に尋ねていた。

もつとも、それは料理での失敗がなかったからこそその軽口も多く含まれていた。

再三ミコトが注意するものの、時間が経つとすぐに元の木阿弥となる。

何が悩みかを尋ねても、何でもないミコトの頭をなでてはぐらかしてしまう。

そんな状況から抜け出す兆しを見せたのは休業日であった。

マサハルにとって鬱屈した気分を晴らす方法は娘達と遊ぶか料理を作るしかなかった。

「父様何作るの〜??」

「かなり贅沢な異国仕立ての料理ですよ。」

マサハルの料理はヒノモト料理の定石の外れたものも多い。基本技術は駒鳥屋ヨネに叩き込まれたものの、マサハルの自由過ぎる発想は彼女をもつてさえも、矯正することは敵わなかった。

今回彼が作る料理はミコトが絶句するほど極め付けに定石から外れていた。彼が材料を仕入に行った場所は、それほどあり得なかったからである。

肉屋はまだしも薬種問屋にも足を運んだのだから。

材料を揃えたマサハルがまず行った事は薬の粉末の調合であった。仕入れてきた粉末を一つ一つ味見しながら混ぜ合わせる割合を決めていく。

周囲には嗅ぎなれない異臭が漂っていた。ガウは鼻が曲がりそうだと出ていった程だ。

出来た粉末を小麦粉と油と一緒に丁寧に、丹念に鍋の中で炒めていく。

途中で刻んだ長ネギを加え、さらにじっくり炒めていく。

ネギの鮮烈な香りと粉末の香ばしさが混然となり、得も言えぬ匂いへと変化する。

「よく分からないけど変わった匂いだね。だけとお腹が減ってくるよ。」

「ははは、魔法の粉を使いましたからね。胃の腑が躍っているんですよ。」

色付くまで炒めたものを水、酒、醤油などで伸ばしていき味が馴染むまで弱火でコトコトと

煮込む。その間に水を張った甕に鶏、牛の肉に人参、大根、白菜などの野菜を一口大に切り切った材料を投入し火をかける。甕の水が煮立つと鍋の中身を丁寧に混ぜ入れた。

「さて、これでは三刻（約6時間）ほど煮込めば完成ですかね。」  
「え？そんなにかかるの！？お腹すいたよ。」

「こればかりは待つしかないよ。夜には食べれるから楽しみにしておきなさい。」

額に汗を滴らせながらも火から目を離さず、それでいて逸るミコトを抑えるマサル。

その顔付きは結果に完璧を求める職人のそれであった。

三刻後、甕を火から外し蓋を開けると熱気と一緒に濃厚な香気が店内に立ち込めた。

身体の中から食欲を掻き立てる感覚に陥りそうな香りにミコトや店に戻ってきたガウの本能は食べる事一色に支配されそうになる。また、漏れ出した空気に引き付けられたのか休業日にも

関わらず店外でも足を止めた通行人達が扉の前に殺到していた。

「大将、今度はどんな料理作ったんだ？」

「ちよつとピリピリするわね。」

「お前ら押すなって。店に迷惑かかるだろうが。」

「構わん。押し込んじゃえ。」

「おい、誰かそいつ叩き出せ！！旦那と大将に腕づくで勝てるわけ



ないだろ……。」

外の騒ぎに気付いたマサハルは2人に絶対に摘み食いしないように念を押すと、勢い良く扉を

開けた。外に出された香気はますます通行人達の鼻腔をくすぐり口からよだれが

こぼれ落ちそうになる。マサハルの登場に多くの人が沸いた。

「大将〜!!!」

「早く食べさせてくれ〜。」

沸き立つ通行人達を見たマサハルは想定していなかった事態に思わずため息を付く。

まさか、自分の作った料理が騒ぎを起こしているとは考えていなかったのである。

「今日は店は休みですよ？他の方々の迷惑にもなりますから散ってくださいよ。」

「いや、あんな匂い出されたんじゃ立ち止まるなって言うのが無理ですぜ。」

「そうそう、大将もここがどんな店なのか自覚した方が良いつて。」

初見で奇妙でゲテモノに思える料理が後の傑作となる店。

食べるのに度胸がいるが一度食べるとやみつきになる店。

それが「良庵」への人々の認識であった。

「良庵」料理は大きく分類して3つのタイプに分かれる。ヒノモトで一般的な料理。

大陸料理をアレンジした料理。最後に、マサハルが独自に作った常識はずれの料理である。

1つ目のタイプは料理の味と良心的な価格のバランスで、2番目と3番目はとにかく味で客の心を掴んでいた。

今回作った料理は、間違いなく3番目に類する料理。マサル自身、まさか3番目のタイプがそこまで大受けしているとは思っていなかったのである。

「今確かに料理は出来ましたが、あれは店で出すものじゃないんですよ。」

「え・・・一口だけでも駄目か？」

「食べてもらう人も決まっていますので駄目ですよ。」

「あ、もしかしてカミさんへか？やっぱり喧嘩してたんじゃないか。」

「大将は謙虚でえらいよ。うちの馬鹿亭主ときたら・・・」

「だったら仕方ないな。今日は帰るか。余ったら食べさせてくれよな。」

はなはだ誤解を与えたままだったが、何も文句を言わずに退いてくれるのであればと

マサルは余計な弁明を一切しなかった。通行人達の背中へ「またのお越しを」と

声を送り、頭を下げる。下げたままの頭をおもむろに上げると、一顧だにせず店内へと戻った。

作った料理の麩に近づいてミコトが火傷をしていないか心配だったからである。その心配は

杞憂だった。ミコトとガウは麩をじっと見ながら匂いを嗅ぎ続けていたからである。

「早く食べたいね。」

「腹いっぱい食いたいぞ。」

ここまで自分に言いつけをきっちり守ってくれれば、早く食べさせてやりたいという

気持ちにもなるが、あいにく店で食べるつもりは毛頭なかった。食べさせる相手が

他にもいたからである。

「さて、出掛けますよ。ガウは甕を荷車に載せてください。道中こぼれないように固定も

忘れずに。ミコトは漬物を出しておいてください。何がこれに合うか分からないから、

なるべく多くね。私はその間に片づけをします。準備が出来たら呼ぶように。」

「任せろっ!!」

「父様どこに出掛けるの?」

「それはもちろんアスカの所ですよ。こういう料理は一緒に食べた方が美味しいですからね。」

「うん」

道中、甕から漏れる未知の匂いが通り過ぎる人々の興味を多分に引いたが、

別段騒ぎになる事はなかった。絡もつとする者はガウの風貌に二の足を踏み、

それ以外の者も「良庵」の店主が何か変な物を作ったと認識したからである。

ガラガラと荷車を引く音を響かせながら、しばらく歩くと目的地の

アスカの住む家に到着した。  
彼らを迎えたのは、美女が二人だった。

「ここに来れば旨い物が食えるという我の勘は当たったようだ。」  
「椿の勘もここまで来ると予知に近いわね・・・それより、アンタも来るなら前もって

言っときなさいよ!!」

「我が告げた途端にあたふた身支度してた者の言う事ではないな。」

腕を組み仁王立ちした椿ともう一人。指摘されると真っ赤な顔して  
「なんて事言うのよ!？」と  
椿に突っかかる。

「ただいま戻りました。元氣そうで安心しましたよ刹那」

「ほれほれ、我らが愛しの旦那様が大久保家に帰還じゃ。家人が応えてやらなくてどうする。」

「ぐ、後で覚えときなさいよ。お、おかえり良太。」

マサハルにとってはもう一人の妻で、アスカの実母。それが大久保刹那だった。

### 13話：マサハルの決断（前編）（後書き）

前編です。

作ってる料理は皆様ご存知の料理です。

ただし、作中の料理を現実に作ったとしたらマサハルの料理は皆様には物足りないものになります。

それだけメジャーですし現実では魔改造されてますからね。

もう一つ、終盤ですがこれは誤植じゃありません。

後付設定でもありません。

マサハルⅡ 大久保良太です。

#### 14話：マサハルの決断（中編1）

陶器に盛られた飯の上に黄みがかったトロみのある汁がかかっていた。

香ばしく魅惑的な匂いの汁の中には野菜や肉がゴロゴロ入っており、ずっしりとした質感を醸し出している。

ヒノモトでは今までなかった料理であった。

「はやくはやく。」

「もう待ちきれないぞ！！」

朝から一日仕事で作った料理を食べる瞬間を今か今かと待ち望み木匙を振り回すミコトとガウ。

「人参しゃん嫌い。」

「好き嫌いしないの。父様がせっかく作ったんだから、きっと美味しく食べれるわよ。」

嫌いな野菜をみて涙目になるアスカと胡坐をかきアスカをひざに乗せながら嗜める刹那。

「変わってはおるが悪くない匂い。また面白い料理を考えたものだな。」

飯は皆が揃ってからという事で、上座に座り先に酒を飲みだす椿。

「やれやれ、ワシにまで毒見をさせるとはいい度胸じゃな。え？良太よ。」

「お褒めに預かり光栄ですよ、お爺様。」

最後の器を盛り付けけるマサハルとその器を受け取る老人。  
彼こそは大久保邸の主人であり何度も名前だけは登場したマサハル、  
大久保良太征遥の祖父にして、  
ヒノモト最強の武人の伝説を欲しいままにした大久保幻斎その人で  
あった。

ここに、マサハル試作料理の審査員の全員が揃った。

「いただきます。」

「「「「「いただきます」「」「」「」

最年長者で家の主人である幻斎の合図で宴が開始される。

掬い上げられた木匙を口に含む。

長時間煮込まれたことで具材は柔らかくなり、肉は適度な弾力を残し、

野菜はホロリと口に解け

肉独特の臭みが消されると共に熱することで引き出された肉の旨みと野菜の甘みが

口一杯に広がる。

また汁自体も独特の辛さ・苦味・香ばしさ・甘みなどが複雑に入り混じり、

それらを白い飯がどっしりと受け止めると同時に米飯特有のほんのりとした甘さを出す。

「おいしいよ」「飯が進むよ」「

「ははは、何杯でも食えるぞ!!」

「父しゃまの方がやっぱりお料理が上手。人参しゃんも食べれる。」

「ぐ・・・事実だけに、事実だけに否定できないけど、女としてはやっぱり腹が立つわね。」

「ん。もう少し辛口の酒の方が合うのかも知れんな。しかしさすが良太。褒めて取らず。」

「わしとしては、このとろみがお前の心尽くしじゃと思うな。汁かけ飯も武士なら構わんが、

ミコトとアスカには行儀が悪かろうて。」

「さすがお爺様、そこを見抜かれましたか。何故か麦の粉がとろみを付けるのに

都合が良かったので利用いたしました。味にも然程影響がないように思われましたしね。」

一心不乱に食べる者、酒を片手にじっくり食べる者、料理を評しながら会話する者と

皆バラバラであったが、料理の評価は一致して上々のものであった。

飯、汁、野菜、肉とボリユームのある内容であったが、

香りと適度な辛味が舌と鼻と胃を刺激し、

何杯でも食べられるような錯覚に陥らせる。

事実、ガウは3杯目、刹那と椿は2杯目に突入していた。

「旨い事は旨いが、ちょっと物足りない気もしてきたぞ。」

「ミコトとアスカの舌に合わせましたからね。そうだとは思ってましたよ。」

マサハルは懐から小さな瓢箪を取り出し、ガウに手渡す。

「ちょっと掛けて試してください。」



「どれどれ・・・！？また味が変わったぞ。辛くなつたのか？？」

「これは・・・唐辛子か。暑くもないのに汗が流れるわ。」

「辛味が増して食欲がわくわね。食べ過ぎて太ったらどうすんのよ！？」

「いや、一応責任は取ってますからね。」

ガウから瓢箪を受け取り、中身を確認する椿。手には少量の赤い粉がのつていた。

ガウ、椿、刹那は思い思いに瓢箪の唐辛子を自分の器にふりかけ、更に食べるペースを速める。

「これは店に出すのか？」

「これ作るのに店の稼ぎの1週間分は消えますからね。とてもお客に出せませんよ。」

「ほとんどが薬種問屋に払う薬代ですがね。」

「そんなにかかるのか。しかし薬が味の決め手なぞ、よく考え付いたものじゃな。」

「昔、いくつか薬を飲まされた際に全部一緒に白湯に溶いたことがあつたんですよ。」

その時すごい不思議な味だったのを覚えてたんですよ。」

「返答に困る思い出だなそれは・・・。」

「良い事も悪い事も、色んな事を糧にしると言ったのはお爺様ですから。」

あ、ミコト！！食べてすぐ寝転がるんじゃないやありません。アスカも真似しない！！」

「は〜い」

然程食が進んでいないものの、久しぶりとあつてか会話を楽しむ幻齋とマサハル。

祖父と孫、そして戦乱を駆け抜けた男と男。時代を共有した二人で

ある。

自然と会話と同時に酒も進む。

「少しは酒を飲めるようになったのじゃな。」

「でなければ、飯屋の稼業は務まりませんよ。」

「ふっ、昔は猪口一杯でつぶれて姫様や刹那の玩具になっておつたのにな。」

「そ、それは若き日の黒い思い出です。あまり言わないで下さい・・・。」

旨い酒に旨い食事。それが宴の盛り上がりを加速される。

その夜の宴も言うに及ばず、各人が楽しんだ良い宴となった。

余談ではあるが、マサハルの作った料理のレシピは後に大金と引き換えに

駒鳥屋ヨネに伝えられる。

また同時に、椿は香辛料の国内における栽培と外国との交易の活性化を決断。

当時は高級料理として料亭で扱われたものの、約20年後には香辛料の大量の普及により

価格も下がり次第に庶民の舌を楽しませるようになる。

未来の歴史家達の手により、マサハルは

「丼物、カレーライス、ラーメンなど国民食の原型を発明した謎の人物」として

その正体の探求は研究テーマの一つとして挙げられることになる。

## 15話：マサハルの決断（中編2）

楽しい宴は永遠に続くものではない。

食べ物、飲み物、そして時間と費えていくものが存在するからである。

とりわけ時間が有限な限り終わりがあると分かるから、

人々は終わりまで精一杯楽しむのである。

大久保邸での宴もそれは例外ではなかった。宴も佳境が過ぎ、各人思い思いに過ごしていた。

酒に強い椿とガウはまだ呑んでいた。ガウはさらにカレーをかき込んでいる。

どちらにも酔いの兆候は見られない。徳利が何本も転がっているにもかかわらずである。

そして、ガウの側には、空になったお櫃が2つと飯が半分以上無くなっているお櫃があった。

「よくそんなに食えるものだ。まあ、男児たる者若いうちはしっかり食すべきだが。」

「主の飯は旨いぞ。まだまだ腹六分目だ」

「そうか、まあ呑め。」

「おっと、奥方殿すまないぞ。」

ガウはヒノモトの王である椿を前にしても全く物怖じしない。

口は悪いが陽気なガウを椿は気に入っていた。

「奥方殿、四刃の誰かと戦わせて欲しいぞ。」  
「皆忙しいのでな。また今度にしてやってくれ。」

極めて好戦的なのはたまに傷ではあるが。

ガウは大陸の出身である。

それをヒノモトに連れてきたのがマサハルだった。

マサハルの話では喧嘩に勝ったら付いてきたと笑っていた。

「四刃とやるのは良いが、良太とは再戦しないのか？」

「良庵」で店員をしているものの、ミコトのように料理の勉強をしている訳でもなく、

学問を学んでいるようでもない。四刃と仕合うならば軍人になって頭角を現した方が

近道である。かといって、マサハルに戦いを仕掛ける素振りを見せない。

「戦いつてのは楽しいぞ。勝ちも負けも糧にして強くなる事が分かる。」

鍛えるつてのも楽しいぞ。やればやるほど強くなれる。」

「ならばなおの事、良太とやれば良いではないか。」

ガウの戦っている姿を見た事はないが、椿は彼を強いと感じていた。それは王として多くの武將を見ていた彼女の経験から来るものであり、

その強さは四刃に迫るだろうと思われた。

「主となあ・・・」

遠い目をしてガウが考え込む素振りを見せる。その額には少量の汗が浮いていた。  
そして、ポツリと呟いた

「主の飯は旨いんだぞ。お嬢は優しいんだぞ。俺と主がやったら、  
両方とも無くなっちまうかも知れんぞ。俺と主のは戦いじゃねえ。」

声に苦悶が入り混じる。

「ありゃ殺し合いだぞ。」

それはどこか憂いを秘めた表情であった。

「こうして太郎は犬といつまでも幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし。」

寝室では刹那が娘達に話を聞かせていた。

「グスン・・・犬しゃんよかった。」

「いいお話だったね。」

娘達は話に見入り、その展開に一喜一憂。その結末に一様の感動を覚えていたようである。

刹那の手にはその類の話が纏められた本があった。

この世界、本は昔ほどではないが安いものでは決してなかった。

かつての権勢は失ったものの大家である大久保家では然程珍しいものではなかったが、その内容は学問であったり兵法や技術であり、いわゆる戦争や政治のための物であった。御伽噺など娯楽のための本など一冊もなかった。

「刹那が教育についての仕事を頑張るなら、こういう本も必要ではないですか？」

マサルが気恥ずかしそうに刹那に手渡した数冊の本。手作りであるうそれらの中にはヒノモトおよび大陸の御伽噺や子供の遊びについての内容が纏められていた。

現在刹那が直接関わっている、役人や軍人を育成する場所には不要な本である。

しかし、よくよく考えると国力向上のためには将来的に子供の教育も視野に入れなければならぬだろう。その事を考えるとなかなかの価値のある書ともいええた。

「刹那母様、次のお話読んで。」

「母しゃま、お話。」

「駄目よ。もう遅いんだし、子供は早く寝なさい。」

カレーを食べた興奮か、久々に家族が揃った嬉しさか、いつもはもう寝ている時間なのに子供達は元気そのものである。彼女達を寝かしつけるのにはまだまだ時間が掛かりそうであった。

（良太つてつくづく、こういうのが好きなのよね。出来れば仕事変わって欲しいけど、

あたしじや店を潰すだけなのよね。うう・・・なんで、もつと料理の勉強しなかつたんだろ。）

気質と資質がここまで合わない人間は珍しい。

それが刹那の夫に対する感想であつた。

縁側ではマサハルと幻斎が並んで月を見ていた。

互いに何も言わない。何を思っているのか、お互いにそれが分かっているのか。

それは誰にも分からないものであつた。

思えば祖父とこんな静かな時を過ごしたことがなかつた。

マサハルにとって幻斎は尊敬すべき人間である事は確かだつた。

戦乱の時代では厳しくも暖かい師であり上司であつた。

しかし、その前に祖父と孫の関係が来ることは、あまりなかつたよ  
うな気がする。

いや、あつたとしても隠れた愛情に気づくには大久保良太であつた  
頃のマサハルは若すぎた。

そして何よりも多忙すぎる幻斎は良太のそばにいる事が少なかつた。  
物心付いた時には両親と死別していたマサハルは孤独だつた。

自然と当時のマサハルの中では実の祖父よりも傍にいた姉代わりだ  
つた椿に

重きを置いていった。

幻斎はこんな時が来るとは思っていなかった。

孫や曾孫に囲まれて、穏やかな平和な時代を過ごせるとは露ほども考えた事がなかった。

自分は戦乱の時代でしか生きられない運命と思い、それを満足と感じていた。

平和な世を若い世代に託して、後は自分は朽ち果てるものだけ考え、

自分に出来る事すなわち戦う事のみを明け暮れた。

気が付けば、我武者羅に戦った自分に忠誠を誓う者がいても、友人や家族が戦の世に消えていったのである。それは自分の息子と義娘、

つまり良太の両親も例外ではなかった。

さらに悪い事に、その頃王家では椿も家族と死別していた。

良太に構うより、どうしても椿の事、国の事が優先された。

そして、それを放棄するには肩に押し掛かる責任は重すぎた。

「お爺様は今でも最強ですか？」

沈黙を破ったのはマサハルの唐突な質問だった。

珍しいと思いながらも孫の問いに、一片の嘘偽りなく幻斎は答える。

「わしも老いた。弱くはなっておろうが、若い者に負ける気はせん



な。

しかし、お前からそんな問いを受けようとはな。明日は槍が降るか？」

現役の時は、四刃が同時に掛かるうが返り討ちにする事が出来た。

年若い、戦う機会も減った今では全盛期は望むべくもないが、

戦う機会、鍛錬する時間が減ったのは執務に追われる彼らとて同じ事。

4人同時はともかく、1対1でなら現役最強と言われる石橋飛翠とて一蹴できるだけの

自信はあった。

「私としては、どっちが強いかなんてどうでもいいんです。相手が強いなら、

どうやって倒すかを考えればいいのですから。

しかし、民は目に映りやすい、分かりやすいものをとかく求めます。

政務、治政にかけて誰も及ばない女王椿の横に立つ夫が無能ではちよつと面倒なんですよ。」

面倒くさそうに、心底どうでもよさそうに答えるマサハル。

その表情は若干ではあるがふてくされていた。

「ふむ・・・確かに一理ある。わしも不遜ながら生きて人々から神の名を与えられるとは

思わなんだしな。しかし、ただ強いだけの者など平和の世には無用と言ったのは

かつてのお前ではないか？それに本音を全て語っているようには見えんがな。」

宴の最中にもマサハルが何かに悩んでいる事が幻斎にも見て取れた。ミコト達と話している時も笑顔を見せてはいるものの、何かが引っ掛かっているように思えた。時々しか見てやれなかったものの、祖父と孫の関係である。多少の癖はすぐ見抜けるようになっていた。

「私にもはっきりとは分かりません。されど、強いて言うなら……」

観念したかのように溜息をつくマサハル。ポツリポツリとためらいながら話していく。

その表情は悪戯が見つかった子供のようでもあった。

「父親としての意地ですかね……椿や刹那には情けない所は見られているので今更です。」

ただ、ミコトとアスカ、それに今後生まれてくるだろう子供達には少しは格好いいところを

見せたいかなとは思っていますよ。

それがただ腕っ節が強いとかではないのは分かっています。が、

漠然としすぎてて悩むだけでは埒が明かないんですよ……です。すから。」

マサハルは表情を整え、真剣な眼差しで幻斎に向き直る。その目は澄んではいるものの挑戦的でもあった。

「ですからお爺様。私と勝負してください。今日はそのために来たのです。」

「面白い。お前の得る答え、楽しみにさせてもらおう。」

15話：マサハルの決断（中編2）（後書き）

15話目です。

我ながらよく投稿が継続したなと感心しております。

これも皆様の暖かい励ましのおかげです。

PVが約20万、ユニークが約3万。

すっごく嬉しいです。

ありがとうございます。

今回は初の戦闘描写があります。

さてさて、上手く書けるやら・・・

**\* コラボ企画の予告です（前書き）**

この作品を読んだ時に、その切り口に衝撃を受けました。

お気に入り登録をした数日後にその作者の方と、とあるチャットで知り合うことが出来ました。

当時からコラボしてみたいと言う気持ちはあったのですが、飯屋が全然進行していなかった事と先方の都合もあり、その想いは封印し飯屋に専念して参りました。しかし、飯屋がある程度進行したことでコラボの依頼を持ちかけた所快諾をいただき、今回予告編を上げさせていただくことになりました。

## \*コロボ企画の予告です

それは・・・変態の起こした事故が原因だった。

「あつ!?!この陣の数字が間違っている。となると・・・どこに行つた?」

「ここはどこ?」

少年が飛ばされたのは異世界。戸惑う少年は突然何者かに連れ去られる!!

その行き先は -

「犬さん拾ってきたよ。」

「犬じゃないよ、コボルトだよ。」

「わんわんしゃん」

「犬・・・ですかね?えつと・・・とりあえず何か食べます?けど、犬って何が駄目なんでしたっけね。」

小さな一軒の飯屋だった。

「僕の名前はモフモフ帝国皇帝シバです。」

犬耳尻尾の癒し系!!コボルト族の魔王候補兼モフモフ帝国皇帝シバ。

「これはご丁寧に。ヒノモト王配のセイヨウと申します。ここでは

マサハルと呼んでください。」

定石無用の腹黒系！！飯屋「良庵」店主兼ヒノモト国王配マサハル。

「うわあ、シバちゃんってモコモコだね。」

「もこもこのふかふか。」

可愛い物好きは女の子の常識。マサハルの娘、ミコト&アスカ。

店での出会いは、楽しい一時の始まりのように思えた。  
しかし……

「シユテン童子??それって確かオオエ山の大妖じゃないですか。」  
伝説の妖魔、シユテン童子復活。その矛先は大きな魔力を持つシバ  
に向けられていた。

「僕のせいで、この国の人達に迷惑が……。」

「仕方ありません。倒しに行きましょう。」

突如襲い掛かったヒノモトの危機に二人は討伐を決意する。

「兵が使えないのですか??」

「そんな……。」

まさに孤立無援。しかし、彼らには心強い味方がいた！！

「もふもふこそ天が与えた……コホン。シバ様の前に立  
ち塞がるものは私が倒す！！」

もふもふ上等！！もふもふを汚す者に生きる価値なし。モフモフ帝  
国大元帥クレリア・フォーンベルグ。

「主、戦か！！楽しくなってきたぞ！！けどその前に腹ごしらえだ。」  
「バトル上等！！三度の飯も好きだが戦いも大好き。「良庵」店員ガ  
ウ。」

そして待ち受けるは伝説の鬼。

「我が名はシュテン童子。人間どもよ、我に全てを献上せよ。」

「たかが、四人でこのわしを倒そうとは片腹痛いわ！！」

「父様、シバちゃん。無事に帰ってきてね。」

「父しゃま・・・」

この戦いの末に待っているのは？？  
ヒノモト・モフモフ帝国の運命は如何に！！

「もふもふ帝国犬国紀」×「小さな飯屋の繁盛記」 コラボ企画小  
説、製作決定。

「もふもふ飯屋風雲記（仮題）」 近日公開！！

**\*コラボ企画の予告です(後書き)**

いや、我ながらワクワクしながらプロットを書いてます。

お預かりしたキャラをどう動かすかにかなり苦戦しておりますが、飯屋の色も壊さないように気を付けながら頑張っ て面白い作品に仕上げたいと思います。

最後になりましたが、快諾いただきました鶺鴒様には心よりお礼申し上げます。



## 16話：マサハルの決断（中編3）

大久保邸の離れにある古い建物。その中は道場の態をなしていた。そこはマサハルも幼い頃から鍛錬に励んだ場所だった。

懐かしき空気と匂いの中、マサハルは過去に戻った錯覚に陥る。

強くなるために忘れるくらい膨大な数の素振りを行った。

何度も何度も祖父に打ち据えられた。吹き飛ばされて壁にぶつかった。

その度に起き上がり時には力尽きるまで立ち向かった。

今はなき祖父の弟子や部下と酒を飲み、倒れた事もあった。

戦死した彼らを偲んで、夜にこっそり泣いた事もあった。

椿が武芸の稽古をする時には稽古台をさせられた。

寸止めのはずが、椿の手元が狂って気絶した事もあった。

（四刃とも仕合った事もありましたね。一度も勝てませんでした）

そっと壁に触れる。今でも過去の情景ははっきりと覚えている。

殆ど勝った事などなかったが、それでも鍛錬のおかげで自分は今でも生きている。

昔に誓った椿を守るという目的は遂げた。そして、家族も出来た。

（そして、今は一介の飯屋の主。しかし、それは続かない・・・）

分かりきっていた事だった。分かりきって、それでも始めた事だった。

望外だった椿と刹那との婚姻も果たし、王配であり大久保良太であ

る事は変えようもない。  
ずっと飯屋をやっていたと考えた事があったが、責務とやらから逃げる気もない。

大久保良太に課せられた役割は十分以上に果たしたつもりだった。他人からの評価はあまり気にしない性質ではあったが自分ではあれ以上は出来ないと考えていた。

限界を超えてやれたと感じていた。

そして、まだまだ不安定だが一応の平和は訪れた。

次は王配セイヨウとしての役割を果たさなければならなかった・・・はずだった。

(まあ、それもまた人生。やる事は変わりはありません)

懐かしい限りではあるが、あまり感傷に浸ってもいられなかった。己の得物を取ってマサハルは振り返る。

「さあ、始めましょうか。酒は抜けましたか？」

なぜなら、マサハルがこれから立合つのは己の祖父でこれまで一度も勝てなかった人物。

「お前が気にする事でもないじゃろうて。腕がなまってないか見てやるうか」

ヒノモト最強、「武神」大久保幻斎その人だからである。

木刀を持って互いに向かい合う。  
マサハルは両手で握り刃上に向ける八相の構えを取り、対する幻斎は片手正眼の構えを取った。  
動かずに睨み合う両者の間に張り詰めた空気が流れる。

（打ち込めませんね、どう動くべきか・・・）

マサハルは開始から一步も動けずにいた。額には既にうっすらと汗が浮かぶ。  
何度も間合いに踏み込もうと考えるも、全て倒される気がしてならなかった。

幻斎の構えを改めて観る。自然体で無駄な力が入ってないにもかかわらず、  
大樹がそびえ立つかの如く泰然としている。  
そこから感じる威圧感は今も昔も変わらなかった。

「来ぬのか？」

「本当はずっと動かなくても良いんですけどね。それも言ってもらえぬでしょう」

挑んだのはマサハルの方である。膠着した場合、彼から動くのが礼儀であった。

意を決したのか、マサハルは構えを正眼へと切り替える。

息を吸っては吐き、吸っては吐く。

次第に心は澄み渡るように落ち着き、五感が敏感になる。

空気の流れ、幻斎の呼吸や剣気が次第に鮮明になる。

幻斎もマサハルの気配の変化に気付いたのか上段へと構えを変える。

マサハルの全身から発せられる氣に呼応するかのようにジワジワと  
劍氣が膨れ上がっていく。

吸っては吐き、吸っては吐く。

呼吸を繰り返すにつれマサハルの氣は次第に小さく鋭くなる。

対して幻斎の劍氣はますます濃く膨れ上がっていく

ぶつかり合う氣と氣。震える空気。揺らぐ蠟燭の焰。

心なしか床や壁が軋む音がする。

吸っては吐き、吸っては吐き、吸って……マサハルは一瞬息を止  
めた。

「ヒュッ！」

吐くと同時に構えは正眼のまま前に踏み込む。

「カハツ……」

一瞬呼吸が止まった幻斎は呻き、構えを僅かに崩してしまう。

呼吸を相手と合わせ、乱す。マサハルは作ったその隙を見逃さな  
ったのである。

剣士同士の立合いでは致命的な隙であった。

（届くかっ!?!）

マサハルは床の上を滑るように幻斎の間合いに入り込み、袈裟斬り  
を放つ。

木刀が相手の肩に入り、それで一本。

普通なら、その流れで立合いは終わっていた。

しかし、ヒノモト最強は人智を超えていた。

瞬時に立て直すと半歩下がり、マサハルを遙かに超える速度で唐竹の斬撃を放ったのである。

武神によって放たれた一撃はマサハルの木刀の峰の部分押し潰し、一気に斬り落とした。

カラカラ・・・

飛んだ刃先が地面に落ち乾いた音を発した。

両者は時間が止まったかのように静止する。  
勝負あり。

幻斎の勝ちであった。

「届きませんでしたか」

「実際には紙一重じゃったよ。あんな易々と入り込まれるとは思っても寄らなかつたわい」

「紙一重ですか。ずいぶんと厚いですね」

座り込んで木刀の断面を撫でながらマサハルは呟いた。

幻斎も胡坐をかいて先程の余韻を楽しむ。

初手は確実にマサハルが制した。

しかし、幻斎が常軌を逸していた。

硬直から立て直すまでの反射の速さ、ギリギリで避ける見切り、斬

撃の速さと破壊力、  
全てが人の域を超えていた。長年に渡って勝ち続けていた人間の真骨頂であった。

人々が神の称号を呼び称えたのは伊達ではなかったのである。

「これで盛りを過ぎたのですから、堪ったものじゃないですよ」  
「よく言うわ。お前とてまだやれたじやろうに」

幻斎の言う通り、マサハルは本気で立合ったが全力ではなかった。しかし、それは幻斎にも言える事であった。なにより、

「あれ以上は私では最後まで止まれませんでした。あくまで仕合なのですから」

「ワシとしては大丈夫だと思うがな・・・いや、無理か」

「え、ええ・・・どっちにしろ、あれで終わりだったようですね」

何かに気付いたのか二人は入り口を凝視しながら会話を交わす。

「ふつ。精々怒られるんじゃない」

「いや、冗談にもなってますよ！？本当に怖いんですからね」

この後の結末が予想できたのかマサハルは慌てふためき、幻斎は苦笑する。

「きよ、今日は家に帰りますので失礼します」

「おいおい、此処がお前の家じやろうに」

「それじゃ今日は店に戻りまっ!？」

「そこまじよ。」

冷たく涼しい声が道場内に響き渡る。刹那だった。顔には笑顔が浮かび上がっているが目が笑っていなかった。それを見たマサハルの顔が引き攣る。

「ねえ、良太？」

「な、なんでしよう刹那？」

美しい笑顔、美しい声色。街を歩けば殆どの男達が魅了され振り向く美貌である。

それが今、マサハルに向けられていた。しかし、向けられたマサハルは真っ青になっていた。

端々に怒気を感じていたからである。武神の喉笛に食い込まんとした男の姿は微塵もなかった。

「久しぶりのお爺様との手合わせですもの。はしゃぐのは分かるわあ」

「そ、そうですね。たまには男らしくあらねばと頑張ってみました」  
「でもね？やり過ぎるのは良くないと思うのよ？」

重ねて言うが、その美しさから戦場では剣姫と呼ばれた美貌がマサハルに振り向けられていた。

しかし、現実には甘くなかった。キレても損なわれない美しさというものが存在していた。

「物騒な気配が寝室まで感じ取れたのよ。アスカがビクついて大変だったんだからね！」

「それはお爺様の気じゃ・・・」

「あんたが仕掛けたんでしょうが！」

「ソノトオリデス」

捲くし立てる刹那と言いつた瞬間に小さくなるマサハル。  
幻斎は刹那と初めて会った頃から変わらぬ二人の關係に懐かしさを  
覚える。

当時の大久保家の格は決して軽くはなかった。大久保良太といえ  
ば次代を期待された少年だった。

それでも良太の頃のマサハルは刹那に殆ど頭が上がらなかったの  
である。

「さて、ワシはそろそろ寝るとしようか」

「大体ねえ、あんたは……あ、おやすみなさいませ、お爺様」

「わ、私達もそろそろ……」

「あんたは駄目よ。これからお説教」

「そ、そんなあ」

腰を上げ、道場を後にする幻斎。背中には刹那の怒った声が届く。  
これも夫婦の仲の良さと笑いながらも、改めて先程の立会いを思い  
返す。

（本当に紙一重じゃったなあ）

己の衰えは感じていたものの、マサハルの成長は想像を超えていた。  
確かに長らく剣を握っていなかったのか腕は若干錆付いていた。  
しかし、それがマサハルの評価に大きく減点を加える事はない。

（奴の強さはそこではない）



長きに渡る戦乱で武こそが男の価値、強さと見なされた風潮の中で大久保幻斎は絶対だった。

武の才能が圧倒的だった祖父と乏しかった孫。

幻斎が絶対的であればあるほど、それに嫉妬した者は大久保良太を侮蔑した。

しかし幻斎は孫の本当の才を見抜く事が出来なかった。いや、殆どの人間が見抜けなかった。

見抜き最も評価したのは、よりもよって敵の王であったムネシゲであった。

「お前が武の才に恵まれていないとかはどうでもいい。お前の使命は戦を生き抜き、

平和な世の役に立つ事だ。」

かつて自分の無力で椿を守れないのではと悩む孫に言い放った幻斎の言葉である。

「お爺様は誰よりも強い人間です。けど、お爺様が一人で頑張りすぎる必要はないと

思いますよ。」

自分の無能があまりにも多くの犠牲を生んだと悔いる幻斎を救った孫の言葉である。

そんなマサハルの優しさが生む強さに魅かれたのが刹那であった。

(そして、刹那も大したものじゃ)

椿と大久保良太。

この関係は戦乱当時、多くの人間が比翼の鳥を想像しえた。

しかし、それはどこか歪で狂っていた。

その関係に割って入り、歪みを叩き壊したのが刹那だった。

そんな刹那を幻斎は高く評価していた。

たとえば、孫が彼女にボコボコにされようとも。

幻斎はふと空を見上げる。

そこには雲一つない夜空に満月が輝いていた。

16話：マサハルの決断（中編3）（後書き）

バトルシーン初挑戦です。

リアルでは一瞬の描写がしっかり書けてますでしょうか？

次回が続き物の完結編となります。

果たしてマサハルの決断の内容とは???

ご期待ください。

## 17話：マサハルの決断（後編1）

翌日早朝、意識が朦朧としながらもマサハルは朝餉の準備をしていた。

昨日の幻斎との立合いによる精神的疲労か刹那の説教の影響からは定かではないが、頬がこけゲツソリとしている。最早、身体に刻み込んだ技量だけで調理をしている状態だった。

そんな状態でもいつも通りの手順で食材を切り、飯を炊き、味噌汁を作る。

「ふあゝ・・・久しぶりによく寝た」

背伸びをしながら椿が酒の影響を微塵も感じさせずに炊事場に入ってくる。

いつもならマサハルが気付いて挨拶をするのだが、何も言わない。

白い寝巻きをはだけてマサハルに見せ付けようとするが、意識が飛びかけてる彼は全く反応しなかった。

「おい、良太？」

「・・・」

夫から期待した反応がないことに不満を覚える椿。

後ろから抱きついてみたりマサハルの目の前で手をヒラヒラさせたりするも応答がない。

「ふむ・・・精根尽き果てておるな。刹那め、久し振りだからと激しく求め過ぎたな」

刹那が聞けば顔を真っ赤にして否定するような事をはっきりと呟く  
椿。

その顔はちょっとした悪戯を思いついた子供のようなものへと変化  
する。

おもむろに両手で良太の頬をはさみ、自分の顔へと近づける。

「良太よ。お前は少し寝ている。私の布団は片付けたゆえ、昔のお  
前の部屋で寝ると良い。

布団はもう敷いてあるからな。」

「・・・」

椿がそう囁くとマサハルはフラフラと炊事場を離れ、言われた場所  
へと移動し始めた。

マサハルの移動を確認した椿は調理中の料理を確認する。

竈からは沸騰した水分が吹き出している。まな板には切ったばかり  
の食材が置かれている。

そして、ある重大な欠陥に気付く。

それは椿にとっても致命的なことであった。

「しまったな・・・この後どうすればいいのか皆目検討がつかん。」

昔から王であった椿は料理をしたことがなかったのである。

そして、その後すぐに女性の甲高い悲鳴と強烈な張り手の音が大久  
保邸に響き渡った。

「父様のほつぺた赤いね〜」

「まっかつか」

「なぜ私は叩かれたのでしょうか？」

朝餉の時間。マサハルは両の頬に見事に真っ赤な手形を付けて膳についた。

手形の作成者はもちろん・・・

「自分の胸に手を当てて考えなさい！」

「おやおや夫婦ならば同衾も当たり前のはずだが？刹那はその年になっても初心だな」

「もとはと言えば椿の仕業でしょうが！！ちよつとは反省しなさい！」

「刹那、もつと落ち着きをもたんか。姫様も悪戯が過ぎますぞ」

先程の出来事に憤慨する刹那。そして、コロコロと笑いそれを茶化す椿。

幻斎はそんな両者をいい年してみつともないと嗜める。

結局のところ、無意識な状態のマサハルはなぜか椿の言われるがままに寝室に移動。

布団に潜り込んだはいが、そこには刹那が寝ていた。

当然気付かないまま倒れ込み刹那を抱きすくめる。

目を覚ました刹那が羞恥のあまり悲鳴をあげ、往復ビンタをお見舞いした。

それが、マサハルの身に起きた出来事のあらましである。

そして、幻斎の呆れた原因はまだあった。

椿は料理が出来ない。それは仕方のない事だった。

生まれた時から包丁すら握った事がないのである。  
そこで椿は料理の出来る者を起こして調理場に連れてきた。  
それがよりにもよって自分の娘のミコトだったのである。  
母親としてそれはどうかと幻斎は頭を抱えなくなった。

結果としてはマサハルが仕込み、ミコトが仕上げた事になる朝餉は  
見事だった。

米は甘く炊き上げられ、味噌汁も塩辛過ぎずコクある味わいに仕上  
がっている。

中の具の豆腐も角が欠けておらず煮崩れもしていない。

魚の塩焼きも皮は焦げ過ぎずに香ばしく焼き上げられており食欲を  
かきたてる。

「うむ。良太の薫陶が行き届いているな。ミコト、城で我に毎日  
飯を作ってくれ」

「えへへ。お店が忙しいから毎日は無理だよ母様」

椿は愛娘の上達振りに顔をにやけさせる。ミコトも母親に褒められ  
て嬉しいのか上機嫌である。

それに反応し対抗しようとする者がいた。アスカである。

「母しやま。アスカもお料理したい。おしえて？」

「ご、ごめんね。母様はお仕事忙しくて、なかなか時間が取れない  
のよ」

アスカにせがまれた刹那は口ごもる。それもそのはず、刹那は料理  
や裁縫が

全く出来なかったのである。ミコトやガウの不在時で刹那が休日の  
時は時折「良庵」にて

マサハルの仕事の手伝いをしている。

しかし、任される仕事は接客のみで調理場には入っていない。

マサハルが調理場に入れないからである。

マサハルは刹那の料理を知っているからこそ頑として譲らなかつた。そして悪い事に刹那はそれを娘に教える機会が中々巡ってこず、アスカにせがまれては

仕事の多忙を理由に逃げ回っている有様だつた。

余談ではあるが、マサハルを除いた面々で一番家事が出来るのは幻斎、次いでミコトという

有様である。

アスカは幼いゆえに除外しても、椿・刹那・ガウは団栗の背比べの状態だつた。

朝餉も終わり解散しようという空気が流れる中、マサハルが皆に声を掛けた。

「椿と刹那に話があります。残ってくれませんか。他の皆は朝餉の片付けをお願いします」

「分かつた。ミコト、アスカ皿を集めなさい。小僧は他の物を炊事場へ頼む。

わしは膳を運ぶでな」

「お願いします。お爺様」

こういう時は常にマサハルが率先して片付けを行っていた。それを他の者に頼んだ。

何か大事な話があるのだらうと察した幻斎が子供達にテキパキと指



示を出す。

そして食器や盆などを手早く纏めると連れ立って出て行ってしまった。

部屋にはマサハル、椿、刹那の三人だけとなる。

マサハルは予め用意していた急須から妻達の湯呑へ茶を注ぐ。

茶の清々しい香りがほのかに鼻腔をくすぐる。

そして、自分の湯呑にも茶を注ぎ一口、二口と口に含み飲み込むと妻達の顔をじつと見詰める。

「な、なによ。朝の事はやり過ぎたと反省してるわよ!」

「いえ、その事じゃないんですよ」

「ふむ、一服の茶というのも乙なものよ」

マサハルの意外に強い視線に狼狽する刹那。対する椿は悠然と茶を飲んでいた。

そんな二人の美しい妻達のいつも通りの反応にマサハルも苦笑を浮かべる。

しかし、すぐに表情を引き締める。それほど、これから話す内容は重大だった。

「これからの事について、私の考えを述べます」

「!?!」

妻達もすぐに真剣な面持ちになる。

これからの事、それすなわち自分達にも関係し、ヒノモトにも関する事になるだろうと

直感したからである。

椿もさすがに茶化さない。それだけの空気がそこに存在していた。

「色々考えました。これからの事もそうですが、これまでの事もです」

マサハルの脳裏には店での様々な光景が浮かび上がる。

試作した料理を無我夢中でかき込む常連達。

暴れる客を店の外へと追い出すガウ

客に自分の手伝いをしてえらいと褒められ照れるミコト。

「大久保良太である事。征遥<sup>セイヨウ</sup>である事。マサハルである事。名に込められた思いや願い」

戦乱時に命を掛けて共に戦った仲間や部下。

そして、常に大きな背中を見せて多くの人を率いた幻斎。自分に料理を作るといふ喜びを具体的にしてくれたヨネ。

「そしてミコトやアスカ、もちろん椿に刹那、私には守るべき者が増えました」

マサハルにとっての宝。

離れていても自分を支えてくれる妻達、日に日に大きく成長する娘達。

「障害となる事が多いでしょう。場合によっては斬らねばならぬ者もいるでしょう」

今から述べる事は大なり小なりヒノモトを騒ぎに巻き込む。

一応の対応策は考えている。それでもやると決めた。

やりたくない事なら全力で逃げる。やると決めたら全力で成し遂げる。

それがマサハルの信条であり、成してきた道であった。

「椿、私に王位を譲ってください」

「あ、あんた何言ってるのよ!？」

それは禅譲の要請という名の爆弾発言だった。

17話：マサハルの決断（後編1）（後書き）

マサハルの決断。それが明らかになりました。

それまで逃げ回っていた王配という身分から王へと変わろうとする  
マサハルの真意はいかに！？

今回が完結編と前回述べましたが、申し訳ありません。  
次回こそ本当に完結編です（汗）

## 18話：マサハルの決断（後編2）

「椿、私に王位を譲ってください」

「あ、あんた何言ってるのよ!？」

マサハルの禅譲の要請に思わず刹那は立ち上がる。

これまでマサハルは王配という立場も大久保良太という立場も避け回っていた。

そう、本来東にいるはずの大久保良太、つまりマサハルがなぜ西のヤマトにいるのか。

それは東の統治を部下に丸投げし黙ってヤマトに潜伏しているからだった。

その事を知らされているのは椿や刹那など極々一部の者達である。唯一の例外である飛翠も偶然の出来事で知っただけで固く口止めをされている。

斉藤夫妻や他の役人においてはマサハルの所在が東と少しも疑っていないかった。

そんな人間が王位を望むという事が信じられなかったし、目の前の夫が野心に目覚めたという事も考えられなかった。

「言葉どおりの意味ですよ刹那」

「で、でも……」

いつもはマサハルに対して強く出る刹那もあまりの出来事に混乱する。

野菜や米を強請るのは訳が違うのだ。彼女の狼狽も当然のことだった。

対して椿は腕を組み押し黙ったまま何も発さない。その様子に刹那は苛立つ。

「椿も何か言いなさいよ！」

刹那の言葉に何の反応もしないまま、椿はジッとマサハルの顔を見ていた。

マサハルも椿の顔を見つめる。まるでお互いの真意を探り合っているかの緊張が漂う。

そして椿から発せられたのは意外にも肯定の言葉だった。

「我も一つの方法としてはありだと思ってたさ。あり得んと思ってる。真っ先に捨てたがな。」

これはな刹那、損もあるが得も多いのよ

「あんたが王のままよりも良いっての!？」

「一概にそうとは簡単には言えぬが・・・ま、刹那にも分かりやすいものだけ挙げようか」

刹那は純粹な武人であった。家老になり政治の世界にも足を踏み入れはしたものの、

自分でも向いているとは思わなかった。そんな刹那に椿は子供に物を教える大人のような口調で

話し始める。握った拳を刹那の前に突き出し、指を伸ばす毎に自身の思う利点を解説していく。

「一つ、大久保派の消滅。元頭領の良太が王になるんだ。今の体制に不満がある連中も逆らう事はなくなるだろうよ。」

戦乱時代でも統一後でも椿は不安定な基盤の上で統治を行っていた。戦乱時代では強大な大久保派の台頭。長きに渡る戦乱で人々の価値観は人の上に立つ者は強き者あるべしという風潮があった。しかし椿は優れた為政者であっても武人ではなかった。

国内では武人を中心とした大久保派や若者で構成された女王派などという派閥が

東の勢力との争いが起きない間は隠れて凌ぎを削っていた。決して完全な一枚岩ではなかったのである。

大久保派の象徴としては武神・大久保幻斎が挙げられる。

女王派の象徴は当然椿である。しかし、ここからが複雑だった。

派閥の筆頭がよりもよって大久保良太であり、

女王派最大の庇護者が幻斎であったからである。

良太達としては本人達の意思とは別に集団の思惑が存在したのだから面倒な事この上なかった。

そしてさらに大久保派の中でも後に良太派とも言える集団が誕生したりで

事態は混沌としていく。

それにも一応の決着が着くのだがそれを語るのは別の話となる。

さらに統一後は元東の勢力の人員の統率も難航していた。

民としては誰が統治者となるうが知ったことではなく、

長きに渡った戦乱の決着が付いたという事で、椿の統治は歓迎されていた。

しかし民を統べるサムライ達はその限りではなかった。

ここでも椿が武人でない事が影響していた。

表立って戦っていない人間に誰が従うかという考えが彼らの根底にあったからである。

逆に戦場で最大の敵であった幻斎や彼らの王が評価した良太の評判は良かった。

過去の風潮は数年では到底払拭しうるものではなかったという事である。

加えて元西の勢力でも四刃と元良太派の対立や良太の事実上の離脱など課題は残る。

大久保良太の戴冠は不完全にはあるものの打開策となりえると椿は考えていた。

「二つ、我が比較的自由に行動できるようになる。拘束からの解放って奴だな」

幼き頃から女王として君臨していた椿はその殆どを城の中で過ごしていた。

抜け出したとしても行動範囲は大久保邸など城下町の一部に限られた。

そんな彼女の好んだのが良太や若者から様々な話を聞く事であった。自分が動けない代わりに各地の様々な話に一喜一憂する。

それは行動範囲が制限された人間がペットを飼う代償行為に似ていた。

その拘束が外れるという事は彼女個人としては歓迎できるものであった。

「三つ目がな・・・お前本気でやるのか？」

「やる？ああ、そつちですか。本気ですよ」

「な、何かやるっての？」



椿の中での三つ目の利点。それは彼女にとってもマサハルにとっても博打に等しかった。

改めて聞き直す事で認識の再確認を行う。

「いいや、逆さ。こいつは何もする気がない。良太よ、お前は王位だけが目的で権力なぞ要らんのだろ？」

ならば我がこれまで通りに政を主導する。三つ目の利点。それすなわち民にとっては暮らしが変わらん事だ。」

「民を治めるといふ点では椿の政を超える事は出来ません。だって私は何もしない方がいいですよ。」

権力は椿が持つてるままで良いんです」

「そうなるも我は本気でやれるという訳か。腕が鳴るな」

椿のとんでもない暴論をマサハルは事もなげに肯定する。

「そして極め付けがこいつが何もしなければいけないほど、悪評は良太に集中する。」

我が今後どんな政策を立てようとな。代わりに良い評判は我にかかる」

「ま、そうなりますよね。その辺はあまり気にしてませんが」

統治者が何もせず、他の者が主導で政治を行う。人はそれを傀儡政治と呼ぶ。

それを肯定し嬉々として語るマサハルと椿。

王位を奪おうとする者と奪われようとする者の会話では到底なかった。

そしてそれに着いて行けない人間が一人。

「良太！あんた何考えてるのよ！？」

マサハルの杜撰すぎる展望に憤る刹那である。  
彼女には夫の真意がまったく理解できなかった。  
マサハルにとつての得が何も感じられなかったからである。  
いや、この場合通じ合う二人が異常なのである。そこにも小さいながら嫉妬心が生じる。

「刹那、控えよ」

「私は良太に・・・」

「もう一度言う。控えよ」

そんな刹那を椿が押しとどめる。

その顔には長年女王として君臨してきた覇気が漂っていた。  
普段なら受け止める事が出来てもこの状況では刹那も押し黙るしか出来なかった。

椿は刹那が口を噤んだのを確認するとマサハルに向き直る。

「良太。刹那と二人きりで話したい。席を外してくれ」

「・・・確かにいきなり過ぎましたからね。刹那が驚くのも無理はありません。」

娘達の様子を見えます」

退室したマサハルを見届け椿は刹那と対面する位置に席を移動する。  
マサハルの足音が消えた頃合をみて刹那に語りかける。

「あまり良太を責めてやるな。あれとて苦しんで出した考えだ」

「んな事は分かってるわよ。ただ、なんで王なのよ？あんたが王の

ままでもいいんじゃないの？

好きな料理を捨ててまで良太がわざわざ手を出す事でもないでしょうが！」

二人ともマサハルの性格など分かりきっていた。

王になる事、王になる事が出来なくても王配として動く事。それを今表明したのである。

同時にそれは「良庵」を閉める事はおろか包丁を握る事すらしない事の表明でもあった。

やるからにはとことんやる、それが自分達の選んだ夫なのである。

刹那はマサハルの表面にみせない苦しみを感じて憤っていた。

「王という立場は決して軽くない。我とてあいつの奥底までは分からぬ。」

だがな、あれは言っておらんがお前とアスカのためというのも大きいんだよ。

特にアスカには父親がおらん事になるやも知れんからな」

刹那とアスカの立場は微妙であった。

ヒノモトにおいて武家の男子が複数の女子を娶るという事は決して珍しい事ではなかった。

血脈を次代に繋げるといふ事も立派な務めであったからである。

名家ともいえる大久保家の血脈を残す。

その点においてはアスカという娘を産んだ刹那は十分な役割を残したといえる。

そしてまだ若い二人である。男児が産まれる事も可能性として十分あった

だが、大久保良太の妻と娘という立場は他にも存在した。それが椿とミコトである。

マサハルと女王椿は夫婦である。そしてマサハルと大久保刹那もまた夫婦である。

マサハルは両者を等しく愛し、娘達も愛した。

椿と刹那、ミコトとアスカの関係も良好であり、

椿はアスカに刹那はミコトに実娘に注ぐそれと同じくらいの愛情を注いだ。

されど女王と王配とその妻。そして娘達。

それは昔からの歴史を辿っても前代未聞の関係であった。

公式の立場としては非常にバランスがおかしく体裁が悪い。

正しい対応の一つとしては、片方の関係を断つこと。

この場合は刹那との離縁を意味する。同時にアスカは父なし子となる。

「そんな・・・」

「そうなりはせぬ。我も望まぬ。それ以上に、あれは何をしてでもお前達を守る。」

口出しする者を排除してでもな」

しかしマサハルが王となった場合、その前提がひっくり返る。

王と正室と側室。公的立場では不平等はあれど私的なものとしては問題はない。

そんな事でひびが入るような関係ではないのである。

ふと椿は部屋の襖をそつと開ける。

庭にはマサハルとミコト、アスカがいた。

ミコトをひざに抱えて、アスカを肩車して地に座り込んでいる。声が聞こえては来ないが歌を謡っているようだ。

「あれにとっては王位とて手段に過ぎんのさ。お前達を守るといっ

結果を得るためのな。

そう考えるとその為だけとも思えてくるな。相変わらず面白い」  
(もう一つ利点があったが、それは別に教えなくても良いだろう)  
「だからこそ王になんてしたくないのよ」

「それは言ってくれるな。我とて決めあぐねているのだからな」

「あんたに文句を言っても仕方ないことよ、これは」  
「ま、どうするにせよ課題は多い。良太にとっては店の事もあるう。  
すぐにどうこうと言っわけではない。だが、程度の差はあれ騒ぎ  
になる事も覚悟しておけ」

「城内の・・・いいえ、琴音達との事もあったわね。良太には散々  
守られてきた。」

今度はあたしが良太を守る番よ」

椿は幼き頃から突拍子もない事を言っではマサハルを振り回してい  
た。

しかし、マサハルも突拍子もない事をしては椿を驚かせ、また笑わ  
せていた。

刹那を連れてきた時も椿は非常に驚いた。

自分以外の女子に興味を持つとは予想外だったからである。

そして拳骨でとはいえ自分以外にマサハルを制御できる人間がいる  
とは考えていなかったのだ。

その頃から椿は刹那に強い興味を覚えた。

それはマサハルへの恋慕の感情に気づくよりも先の事であった。

マサハル、いや大久保良太と椿と刹那。

彼女達は果たしてどのような経緯で今に至ったのか。

そして、「良庵」の出来た切っ掛けは何か？

それには統一までの歴史を絡めた彼らの過去を語らねばならない。

そして、その物語はまさしく良太が生まれ椿と出会った瞬間から始まるのである。

## 18話：マサハルの決断（後編2）（後書き）

マサハルの決断は今回で完結です。

そして、第1部が終了です。

自分的にはかなり長かった気がします。

今話は文を纏めるのに手間取り時間がかかりすぎました。

投稿が遅くなりました事をお詫び申し上げます。

さて次回以降ですが、いくつかのシリーズを同時展開させます。

- 1、鵜様作「もふもふ帝国犬国記」とのコラボ
- 2、過去編
- 3、第2部

恐らくその場のノリでどの話を書き上げるのかを決めるので、ペースに偏りが出てくると思います。

コラボは4話を予定しているのですがすぐ終わるでしょう。

しかし、他2つは何話になるかを想定しておりません。

そんな無計画な作者ではありますが、温く見守っていただければ幸いです。感想などもお待ちしております。

## 1話・運命の出会い（前書き）

過去編の始まりです。

ほのぼのはありますが、位置付けとしては戦記物となります。

この章ではマサハルを幼名の良太で語ります。  
ミコトやガウは終盤にちよっと出るだけです。  
出番は2部をご覧ください。



## 1話・運命の出会い

それは運命だったのだろうか。それとも必然だったのだろうか。

そんな事は当時の人間達にしか分かるはずもない。

しかし、後世の歴史家達の意見は一致している。

「その物語は少女と赤子の出会いから始まった」と。

「これはなんじゃ?」

少女は初めてみるモノを目の前に興味心身になっていた。

白い布に包まれてスヤスヤと眠っている。

顔にはしわ時折ピクピク動く唇や鼻に少女は一々感心する。

そんな少女の反応に微笑ましさを感じながら薄い黄色の着物を着た長髪の女性は返答した。

「私の息子ですよ」

少女は目の前の女性が子供を産んだ事を思い出す。

見せて欲しいと頼んだものの周りの人間にまだ早いと諫められていたのである。

少女は女性の腕に抱かれた赤子の顔を覗き込み、頬を突いてみる。

「これが赤子というものか。わらわは初めてみるぞ」

「だ？」

赤子はむず痒かったのか身じろぎしながら目を薄くあける。

「おお！動いたぞ」

赤子の反応が気に入ったのかさらに頬をプニプニと突く。

感触はとても柔らかかで心地よく、それでいて弾力に満ちていた。

少女は夢中で赤子の頬を突付いていた。赤子の表情が歪むのに気づかないまま。

そして、それは訪れる。

「おぎゃ あああ」

「ぬあ！？な、なんじゃ」

突然、赤子が火がついたように泣き出した。

少女も突然の事に驚き尻餅をつく。

女性はあらあらと苦笑しながら腕の中の赤子をゆっくりと揺らす。しかし、なかなか泣き止まない。

「これ、泣き止まぬか。おぎゃあじゃ分からん」

慌てた少女は赤子を説得しようとして話しかけるが当然のことながら泣き止むことはない。

次第に少女の目にも涙が浮かぶ。

「うっ……わらわが泣きたくなるぞ」

「そういう時はこうして抱いてやると泣き止みます」

女性は少女に赤子を抱かせる。

すると、泣き声がピタツと止まった。  
それどころか赤子はキャツキャツと笑い始めた。  
その様子に少女も女性もホツとする。

「赤子はなくのが仕事でございます。姫様もよく泣いていたと聞いております」

「ふーん。そうだったのかの？」

少女は物心付く前に両親と死別していた。

それからは女性が母親代わりにこれまで面倒を見ていたのである。  
気もそぞろに少女は自分の腕の中の赤子をじっと見つめる。

赤子も初めてみる少女に興味心身なのか服や顔を触りまくる。

その様子に少女は鬱陶しさよりも心地よさを覚える。

「わらわも欲しいぞ。どうすればもらえるのじゃ？」

「まだ早ようございます。大人になってからでないかと授かるものも授かりません」

「そうなのか・・・ならばこれをわらわにくれ」

少女は赤子をすっかり気に入ってしまった。

腕が疲れるはずなのに高い高いをするなど赤子を自分なりに可愛がる。

赤子も少女に弄ばれるのが気に入ったのか笑顔になつてはしゃぐ。

そんな様子に微笑ましさを感じながらも女性は少女を嗜める。

「人は物ではありませんよ。それにこれから、この子の姉としてしっかりして頂かないと」

「なんと。わらわはお姉ちゃんだったのか」

「ええ。姫様の弟として、ゆくゆくは支えとしてこの子は立派に成長してもらわないといけません」

「ふむ・・・そうか。・・・そうか！」

これから赤子とずっと一緒に遊べると思ったのだろう。  
姫様と呼ばれた少女・椿の目は輝き口はにやける。

しかし、椿はある事に気づいた。

それはこれから共に過ごすにあたって、とても大事な事だった。

「この名前は何かというのじゃ？」

女性も己の失態に気づき、微笑みながら名を告げる。

彼女の亡くなった夫、赤子の父が悩んだ末に決めた名を。

戦が繰り返されている戦乱の世。

しかし、真っ先に巻き込まれる立場の椿の周囲でもその一時だけは  
平和だった。

椿の腕の中で笑いかける赤子との邂逅。

それが「大君」椿と「戦極めし者」大久保良太の出会いの一幕であ  
った。

1話・運命の出会い（後書き）

1話・天敵襲来（前書き）

第2部です。

王位を望んだマサハル。

果たしてそれがこれからどう影響するのでしょうか。

## 1話：天敵襲来

ヒノモトの首都ヤマト。

中心部に女王椿の住まう城を構え、四方が城下町として発展している大都市である。

その日もある地区の大通りは行き交う人々で賑わっていた。

散策に出る青年や商いに奔走する商人、芝居見物に出かける町人などでごった返してる。

そんな中を一際異彩を放った夫婦が疾走していた。

女性の方は一目見ただけで分かる伶俐な美貌が怒気で染まっており、肩をいからせながら人ごみを通り抜けていく。

一方で男性の方はそんな妻の後方を身の丈7尺を超える体で窮屈そうに追いかけている。

鬼瓦とも言つべき強面とヒノモトの人間の平均からは逸脱した体躯に通行人は驚き道を譲るかのように後退る。

自分のせいだとは思ってもせず、男性は妻を嗜める。

「少しは落ち着かんかい。皆が怖がっておるじゃろが」

夫の忠告に妻はピタッと立ち止まる。しかし、歩みを止めても肩の震えを止めることはかなわなかった。

振り向き夫に怒りの感情をぶつける。その様は口から炎を吐き出す竜のようである。

遠巻きに見ていた人達も何事かと固唾を呑んで見守るしか出来なかった。

「これが落ち着いていられるか！あなたも聞いていただろう！」

「それは分かつておる。されど、その怒りを今は秘めておけ。」

「ここは天下の往来だ。町の衆に迷惑をかけてはならぬ」

「くっ……」

夫の注意に妻は体を震わせると大きく息を吐く。

落ち着きを取り戻しはしていないものの全身から立ち込める感情を隠せるほどには

静まっていた。

それを確認した夫は周囲に向かって頭を下げる。

「皆の衆。お騒がせし申した」

周囲の人達は突然の謝罪に言葉も出ない。

強面がどんなに頭を低くしても怖いものは怖い。

そして夫の強面は何もせずとも顔を見た赤子が泣き出し老人が腰を抜かすレベルであった。

よって誰も動けずにいた。何をされるか分かったものではないからだ。

自分が原因の一端を握っているとは思ってもよらない夫は頭を上げると妻の手を引いて

その場を離れる。

後に残ったのは未だに動けない通行人達だけであった。

この夫婦はとある機密を自分が仕える主人より聞かされた。

それは世間に漏れれば非常にまずい事項であり、主人からも堅く口



止めをされていた。

その機密に深く関っていた妻は怒り狂った。彼女の中で想定外の事態だからであった。

夫もそれに呆れながらも対処に困っていた。

妻の怒りは理解できるものの、機密の内容にも問題があった。妻にも原因の一端があったからである。

下手をすれば夫婦にも、とばっちりがやって来るのは目に見えていた。

二人は事の真相を確かめるべく、とある場所に赴く最中であった。

「いやあ、ヤン殿に手伝ってもらって申し訳ないですよ」

「気にする事ないヨ。マサハルさんの頼みだし、私でも料理の事なら力になれるヨ」

その日、飯屋「良庵」で店主マサハルはヤンの力を借りてある料理の開発に乗り出していた。

元々大陸の料理であったそれをヒノモト風にアレンジしようという試みである。

竈には様々な野菜や肉を使い出汁を取った麩が幾つもグツグツと煮込まれていた。

他にも骨から取った出汁や様々な具材が麩や鉢に入れられている。あまりの大仰しさにミコトの目が丸くなったほどだ。

「そうそう。その調子で伸ばしていくヨ」

「これはけっこう難しいですね」

「マサハルさんなら刀削も出来るだろうけど、あれはもっと難しい

ネ

マサハルはヤンの指導で小麦を練った塊を竹の棒に足をかけテンポよく伸ばしていく。

薄く伸ばされた小麦の塊は折りたたまれまた伸ばされる。丹念に練られた生地は弾力をおび食感を生み出していく。

それを繰り返していると店の扉が開けられた。

表には暖簾も掛かっておらず準備中の札を立てていたにもかかわらずである。

現れたのは飛翠であった。

慌てて走ってきたのか顔には汗が流れ、ハアハアと荒い呼吸を繰り返す。

「今は準備中ですよ。それに手が離せないんですよ」

「はあはあ・・・」

「マサハルさん・・・飛翠様と知り合いだったか？」

かつて椿に料理を振舞った際にヤンと飛翠は面識を持っていた。しかし、一介の飯屋の主であるマサハルと飛翠に面識があるとは思っていなかったのである。

「ええ、昔馴染みですよ。それにしても慌ててどうしたのです？」

ヤン殿、申し訳ありませんが水を飲ましてやってください」

「わかったネ」

ヤンは大振りの湯呑みに水を入れ飛翠に手渡す。

渡された飛翠は勢いよく飲み干し息を落ち着ける。

「ふう、手間をかけさせた」

「そんな事よりどうしたのです？治安を預かる人物がその様では町の皆さんが不安がりますよ」

「そんな事はどうでもいい！！」

飛翠は生地を練っているマサハルの腕を取り引っ張り上げようとする。

片足を竹に掛けているためにマサハルは思わずバランスを崩し転びかける。

竹が地面にカラカラと音を立てる

「ちよ、何するんですか!？」

「何も言わずに今すぐこの場を離れるんだ」

「は？」

焦りの表情を浮かべる飛翠にマサハルは訳が分からなくなる。

戸惑いの表情を浮かべるだけで動こうとしないマサハルに業を煮やしたのか

飛翠は掴んだマサハルの腕を引っ張り外へ連れ出そうとする。

「お前がここにいた事があいつらにばれた」

「は？なんでです？」

「あの方がばらしたんだよ！急がないと大変なことになるぞ」

マサハルの正体はごく限られた人物にのみ知らされていた。

ヤマトにいる人物の中では偶然知ってしまった飛翠を除いては、妻である椿と刹那、祖父の幻斎に料理の師匠である駒鳥屋ヨネだけであった。

そして、飛翠の言うあの方とはヒノモトの女王である椿のことであった。

マサハルは誰にばらし、椿がなぜばらしたのか大方の見当がついた。逃げても良いが無駄に終わる事は推測できた。なぜなら、

「そんな事言われても、もう近くまで来てますよ。」

もう少し早く来てくれれば間に合ったんですがね」

「げっ！？遅かったか・・・」

飛翠は手を顔に当て天を仰ぐ。

これから起こる騒ぎの予想が出来たからである。

ヤンは突然の展開についていけない。呆然としている。

肝心のマサハルはどうしたものかと頭をかいていた。

扉がガラガラと開けられる。

マサハルは突然来た珍客に声をかける。

現れたのは二人の人物であった。

「いらつしゃいませ。お二人とも久しぶりですね」

「まさか本当にこちらにおられるとはな・・・」

「ここここここ・・・」

一人は呆然とし、もう一人は顔を真っ赤にして怒りのあまり呂律が回らない状態だった

「この大馬鹿者がああああっ！！」

そして大久保良太の天敵と評された斎藤琴音の大声が店内に響き渡った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9381t/>

---

小さな飯屋の繁盛記

2011年9月28日04時11分発行